

召喚した貞子さんが俺を呪い殺そうとずっと見つめてくるんだが  
.....

芋けんび

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夜中にアマプラでリング観ててふと思いついた一発ネタ。

あと10分で3時様より素敵なイラストを描いていただきました

！

(<https://twitter.com/3nvea>)

ジュン様より貞子さんのセントグラフを描いていただきました

！

(<https://twitter.com/jungdkys3>)

2)

揭示板	幕間	1 2話	1 1話	1 0話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
95	86	78	68	56	48	41	36	29	22	17	12	7	1

目次

# 1話

呪いのビデオをご存知だろうか。

ソレを観た者は1週間後に死ぬとされる。恨み、憎しみ、怨念で構築された呪いと死の映像から逃れることは不可能であり、再生したものは迫る恐怖を大人しく受け入れるしかない。

人類最後のマスター、藤丸立香は緊張した面持ちで召喚サークルの前に立っていた。

「ロマニ〜。そつちの準備はいいかい？」

「ああ、OKだ。いつでも起動できる」

どんな英霊が呼び出されるのかという期待、その英霊と上手くやっついていけるのかという不安。このカルデアには様々なサーヴァント達が居る。戦士、王、聖女、騎士、神、ローマ、ローマ、ローマ…。自分には素人の魔術師で戦いの経験などない。それでも…人類の焼却を指をくわえて見てるなんて俺にはでき！「立香くん始めていいよ〜」

あ、はい。

何回目かの詠唱を唱え始める。最初は詠唱を中々覚えられなくて本当に苦労した。忘れ防止の最終手段として詠唱をメモったメモ用紙のお陰でスラスラ覚えられるようになったっけ。

「お、おお何だこの数値は!?最初は平均値より少し下側だったのが急に上昇し始めたぞ!」

「なに?それは本当かいロマニ。どれどれ…」

ダヴィンチちゃんモニターを覗き込む。

「これは…アヴエンジャラー復讐者?エクストラクラスか…!」

エクストラクラスだって?ご、ごくり…。通常の7つのクラスのもどれにも該当しないクラス。シールドであるマシユもここに位置する。

青い3つの輪が小刻みに波打ってゆっくり回り出す。

「……………」

眩い白い光に包まれて姿を現したのは襤褸の薄汚れた白装束に身を包み、顔を覆い隠すほどの長い黒髪。猫背気味で長身華奢の青白い女だった。

「え……さ、さだ……！」

藤丸の目が大きく見開かれる。

女は召喚されたにも関わらず、俯いたまま体を左右にユラユラ揺らすという奇妙な動作を繰り返し、裸足で突っ立っている。はつきり言って不気味だ。ずっと喋らないでいる事を不審に思ったダヴィンチが彼女に話し掛ける。

「やあ、初めまして。私はレオナルド・ダ・ヴィンチ。まずは召喚に応じてくれたことに感謝を。さて、早速で申し訳ないんだけど…君が何者かを教えてはくれないだろうか」

「……………」

「なるほどね。うんうん、素直でよろしい」

「ええ!? どう見ても無言だったと思うけど、彼女が何を言ってるのかキミにはわかるのかい!」

「いや、さっぱりわからないよ。わからないけど…何となく「はじめまして」って言ってる様な気がしたのさ」

「要するにそれって何もわかってないんじゃないか…」

「まあ、そうとも言うね。ハッハッハ!とところで、だ。ロマニ。彼女の詳細はわかったのかい?」

「それが今一通りざっと調べて見たけど、彼女の逸話はまったく見つかからないんだ。データベースには名前とクラス、そしてステータスくらいしか記録されてなかったよ」

「記録は有るのに逸話がない? 随分とちぐはぐというか…矛盾しているね。ふむ…興味深いな。立香くんは何か知ってるかい? さつきからずつと何かこの世の終わりみたいな顔して叫んでるみたいだけど」

「イヤだアアア! 俺はまだ死にたくないいいい!

お、俺にはまだやりたいことが残ってるんだア!

お、俺にはまだあゝあゝあゝあゝ…」

真つ青な顔で金魚のごとく口をパクパクさせながら女を見つめる立香。その瞳の色は恐怖と混乱で埋め尽くされているようにダヴィンチには思えた。故に、そこから導き出された結論は実に単純明快なもので。

「君は彼女を知ってるんだね？」

「も、もちろん。彼女は山村貞子と言って、日本では知らない人がいないほど超有名な人物です…。でも何で貞子さんが…」

「マスター。この後のトレーニングなんだか…ん？新しいサーヴァントか？んな!?か、彼女は…!!」

余りの大声に藤丸から話を聞こうとしていたロマニとダヴィンチの視線が大声の主に向く。

「お、おかん！丁度よかった助けて！俺はもうダメだ…おしまいだあ…」

「誰がおかんだ！それにしても驚いたな…。まさか、彼女が本当に実在するとは…」

部屋に入って来たのはアーチャーなのに剣で戦うクールなナイスマイク、ことエミヤだった。どんな時でも冷静沈着で頼りになる彼だが、山村貞子を見る瞳は珍獣を見るような…そして少しばかりの恐怖を含んだものだった。

おまけ

【真名】

山村 貞子

【読み】

やまむら さだこ

【性別】

アンドロギヌス  
両性具有

女性の体、男性の体の両方がある。  
率直に言えばふ〇なり

【身長】

160cm弱

【体重】

50kg

【CLASS】

アヴェンジャー（Avenger）

【属性】

混沌・悪

【隠し属性】

幻霊

【ステータス】

筋力：B

耐久：B

敏捷：A

魔力：A++

幸運：E

宝具：EX

【クラススキル】

復讐者：A

復讐者として、人の怨みと怨念を一身に集める在り方がスキルとなったもの。怨み・怨念が貯まりやすい。周囲から敵意を向けられやすくなるが、向けられた負の感情はただちにアヴェンジャーの力へと変わる。

忘却補正：A

人の醜い悪意、欲望によつて短きその人生に幕を閉じた彼女は、例えどんなに長い年月が経とうとも、恨み、憎悪を忘れはしない。

単独顕現：C

単体で現世に現れるスキル。単独行動のウルトラ上位版。

本来はビーストしか持ち得ぬ特性。





【宝具】

???

自身の死に場所である“迷霧の森の井戸”を自身の怨念で具現化して形成。固有結界とは似て異なる呪いに満ちた異空間を展開する。第三者の介入・魔術・加護・宝具・スキルなど全てを封殺する。

## 2話

カルデアの無駄に長つたらしい廊下を貞子さんと一緒に歩いていく。俺が先導して前を歩き、貞子さんがその後ろを非常にゆつたりとした速度で歩く。

「いや、まさか貞子さんが俺達に力を貸してくれるなんて。俺はマスターの藤丸立香。協力してくれて本当にありがとう。これからよろしくね」

「……………」

ペタ…ペタ

「……………」

「……………」

ペタ…ペタ

んわあああああ！気まずい！え、何でずっと無言なの？いきなり召喚したから怒ってるの？それとも召喚した時点で、意図せず死亡フラグがいつの間にか立ってたの？ワケワカンナイヨーー！！こんな事ならエミヤにも付いてきて貰えばよかった！後ろからの突き刺すような視線が気になって仕方ないよ…！大丈夫だよ？いきなり後ろから首締められないよね？

「先輩、こんにちは。今からトレーニングですか？」

「マシユか。違うよ。貞子さんを部屋に案内してるところ」

「貞子さん？あ、新しく来られたサーヴァントの方ですね。初めまして。私はマシユ・キリエライトと言います」

「……………」

「あの…？」

「あー…ごめんねマシユ。貞子さんは照れ屋というかその…。変わりに俺が貞子さんの紹介をするよ。彼女は山村貞子と言って、日本じゃ知らない人がいないほど超有名（怖がられているという意味で）な人なんだ」

「なるほど、日本で有名な方ですか。きっとそれだけ偉大な功績を挙

げられた方、という事ですな！そんなに有名な方を今まで知らなかったなんて…。自分が恥ずかしいです」

——何だかとてもなく勘違いされている様な気がする。本  
当の事を伝えた方がいいのだろうか…。いやでも、とってもキラキラ  
状態のマシユに真実を教えるのは罪悪感で気が引ける。くそ！俺は  
どうすればいいんだ！

「あの、先輩。私も御一緒させていただいても大丈夫ですか？」

「俺は大丈夫だよ。でも、貞子さんが」

「ア、ア、ア、ア、ア」

チラリと貞子さんの様子を伺うと低い唸り声を上げた。これは  
どっちの意味なんだろうか。「私は別に構わないわよ♪」って意味な  
のか。はたまた、「巫山戯るなよ人間。お前ら纏めて呪い殺してやろ  
うか」の意味なのか。後者だったらどう足掻いても絶望しかない。

相も変わらず体を左右に揺らしながら俺の後ろで棒立ちしている  
貞子さん。うーん：特にアクションは起こさなみたいだし…、これ  
は：許されたのだろうか？よし、ここはポジティブに捉えようそうし  
よう。

「うん、恐らくだけど…いいと思う。一緒に行こうかマシユ」

「はい！ありがとうございます！」

そう言つて貞子さんの後ろをマシユが歩く。いやちよつと待て。  
何でド○クエみたいに1列なの？廊下のスペースはあるんだから別  
に俺の横でもいいのに。…はっ!?さては、マシユ…。俺を守ろうとし  
てくれているのか！貞子さんが何かアクションを起こした瞬間いつ  
でも助けに入れる様に！後ろから！

「やっぱりマシユは頼りになるね。本当にありがとう」

「へ？あ、ありがとうございます先輩。急にどうしたんですか？」

「何でもない…何でもないんだ」

「？」

「ア、ア、ア、ア、ア」

廊下を暫く歩き貞子さんの自室となる部屋に辿り着く。ここカルデアは元々は各マスター、スタッフごとに部屋が幾つも用意されていたが、レフ・ライノールの爆破事件でスタッフ、マスターがごっそり減ってしまったのもあって、部屋が有り余っている状態となっている。今ではサーヴァント達の部屋になっていて、各サーヴァントのクラスごとに部屋割りをして、そこで生活兼待機をしてもらっている。皆は思い思いに自室を改造、改築しているようで、太陽王オジマンディアス、英雄王ギルガメッシュの部屋なんてそれはもう凄かった（語彙力）

貞子さんはアヴェンジャーだから、アヴェンジャーのフロア。現状カルデアにいるアヴェンジャーと言えば、ジャンヌオルタと巖窟王だったっけ。二人ともかなり我が強いが貞子さんは上手くやっていけるのだろうか…。特にジャンヌオルタなんて煽り性能高いから貞子さんを怒らしたりしないか心配だ。

「はい、ここが貞子さんの部屋だよ。部屋の中は好きに改造しても大丈夫ってさつきダヴィンチちゃんが言ってたから自由にやってもいいよ」

「何かわからないことや困ったことがあれば気軽に私や先輩に仰ってくださいね。もちろんダヴィンチさんやドクター、スタッフの皆さんや、他のサーヴァントの皆さんでも大丈夫ですよ」

「アゝアゝアゝアゝアゝ」

返事なのか唯の唸り声なのかはわからないが、ユラユラ揺れながら自分の部屋へと入っていく。

それから程なくして、食堂でオカン…じゃなかった、エミヤが作ってくれた和風ハンバーグ定食を頬張っていると慌てた様子で食堂に転がり込んでくる人物がいた。

「旦那っ！飯のところ悪いが急いで廊下に来てくれ！」

「ロビンじゃん。どしたの？かなり慌てた様子だけど」

「ここまで走ってきたのか、膝に手を置いて息を切らしている。」

「施設の至る所に誰が置いたかわからねえ変なガラクタが大量に散乱してやがるんだよ」

「変なガラクタ？何それ？」

「ほら！そこにもあるだろ」とロビンフッドが指を指す方向を見ると、沖田さんやノツブが座っている場所のテーブルにはかなり古びたテレビが置いてあった。テーブルには大きい亀裂が入っている。ノツブはビックリしたのか椅子から転げ落ちていた。…あんなものさっきまでは無かったはずだ。一体いつの間に…。

「ノブウ!?き、急に何事じゃ!?!説明せい人斬り！」

「私に言われてもわかりませんよお!?!いきなり何でモニターが上から落っこちて来たんですか!?!薩長の奇襲か何かですか!」

辺りを見渡せば2人が座ってた場所だけではなかった。食堂に配置されている各テーブル、椅子、床、そして厨房にまで謎のテレビに侵食されていた。

——誰が見ても只事ではない。

ロビンフッドと共に廊下へ急いで向かう。彼の言うとおり、確かに廊下の至る所にテレビの山が転がっている。

「これは…」

「な、明らかにやばいだろ旦那。誰の仕業かは知らねえが、こんなガラクタばら撒いて何がしたいのかねえ奴さんは」

「一体何が目的なんだ…」

「用心しとけよ旦那。一件唯のガラクタにも見えるが、それ全部からかなりの魔力反応があるぜ。それもかなりのな」

それ、というのはこの大量のテレビのことだろう。全部に魔力反応があるだって？大規模な魔力で構築された特殊なテレビという事か。ロビンの言う通り、それが施設や廊下に置いてある理由はなんだ？うーん…さっぱりわからん！一旦戻ってダヴィンチちゃんやドクターに相談しないと…。

「くそ、体が突然硬直して動かねえ！マスター！後ろ気を付けろ！」

「え？一体どうし…」

「——アッアッアッアッ——」

——低い唸り声がすぐ背後から聴こえて勢いよく後ろを振り返る。すぐ後ろには、長い黒髪で覆われた貞子さんの顔面があった。

「えーと…。こ、こんには…」

いきなり音もなく背後に立つのは反則じゃない？

髪の間からチラリと見える鋭い眼。

目を合わせたらダメだと分かっていたはずなのに——俺は彼女と目が合ってしまった。

へー、貞子さんって意外と可愛い瞳してるね？（現実逃避）

### 3話

間違いない。この時代を感じるブラウン管のテレビを施設の至る場所に置いたのは貞子さんだ。目的は皆に呪いのビデオを観せるためなのか？俺達を纏めて呪い殺すつもりでいるのか貞子さんは。

——怖い。

全身の震えが止まらない。首元に迫る色の悪い手を、俺は振り払うことができずにいた。死がすぐ目の前にあると言うのに。昔ネットで調べた情報だが、どうやら貞子さんと目が合った者は呪われて死ぬらしい。どうすんのこれ。俺思いつきり目合っちゃったよ？今も殺意ビンビンに感じる眼差しで俺を睨み付けて来るんだけど。というか、何でロビンは俺の横にいるのにずっと険しい顔でローマ立ちしたまま動かないの？ローマなの？ポージングなの？俺の命よりポージングが大事なのか？

「アッアッアッアッアッアッアッアッ」

「どうなってやがるんだ!?この女の目を見た瞬間に体がまるで金縛りにあつた様に動かなくなっちゃった!」

動かなくなつただと？え、じゃあ俺の体がさつきからピクリとも動かないのも貞子さんの仕業つてこと？そんなんどうやって逃げればいいのさ。

「くそ！俺が横にいながらなんてザマだ。早く逃げろ旦那！このままだと…フガア!」

自身の長い髪の毛で器用にロビンフットの口を塞ぐ。それどうやって動かしてるの？念？

逃げろつて言われたつてさあ！だから逃げられないつて言ってるじゃん！ちきしょう…怖すぎて泣きたくもないのに涙が出てきやがった。俺の命もここまでなのか。俺が死んだら人類はどうなるんだ。どんなに極限状態で逃げ出したいつて思っても、今更引き返すこ

となんてできやしない——後戻りしても、そこにあるのは朽ちた橋。その先を渡ることなんて俺にはできない。だから俺は：おれ—あれ？気づかなかったけど貞子さんって意外と胸大きくない？おまけにめっちゃ顔立ち整ってて美人だし。心なしか、いい匂いまでしてくる気がする。柑橘類みたいなの：レモンかなこれ。とにかくフレツシユな香りがする。臭いと思われたくないから清潔感に気を使ってるのかな。そういう所を気にする貞子さんって、

「可愛い…ね」

「アッアッアッアッアッアッアッ」

俺の首元に手を近付けて唸っていた低い声が途中で止む。

両目から大量の水を流しながら何言ってるんだ俺は。死の恐怖と混乱で頭までおかしくなったのか？俺はもうすぐ殺されるんだぞ。いや、こんな美人に殺されるなら本望か。：いや待て。何か様子がおかしいぞ。しゃがみ込んで頭を抱えてどうしたんだ。明らかに悩んでるような仕草だ。悩んでる？何に？

「あ、あの…？」

「……………」

「消えた!？」

忽然と貞子さんが目の前から一瞬で消えた。あまりの驚きに目を見開く。だからさっき俺の背後に音もなく立ってたのか。そんなのアサシンじゃないか！でも、どうして急に手を止めたんだ？明らかに俺を殺す意思があったように思えたけど…。ただの気まぐれ？それとも何か別の理由があるとでも…。

「旦那大丈夫か!?すまねえ…。俺がアンタを守らなきゃならねーのに、何もできなかつた。にしても、あの女は一体何なんだ?」

「ロビンが謝る必要はないって。金縛りで動けなかつたんだし。あのローマ立ちはなんかイラツと来たけど！あの人は新しく仲間に加わってくれた貞子さんだよ」

「したくてあの恰好したんじゃないやねーよ！偶然あの状態のまま金縛りにあつたんだっての。にしても、貞子さんねー…。どう考えても危険度EXのヤバい奴だと思っすけどねー…俺は」



「ヤバいのは俺も認めるけど…。でも、少なくとも召喚に応じてくれたってことは俺達に力を貸してくれるってことだと思おうよ。俺はそう信じてる」

「ったく、あんたはまたそうやって…。現在進行形で殺されそうになつてたのは何処の誰でしたっけ？」

頭をガシガシ掻きながらクソデカため息を吐くロビン。…なんだよその顔は。確かに自分でもバカな考えだとは思うけどさ。震え上がるほど恐ろしい眼だったけど、悲しそうに見えた俺はとつくに呪われてるのか？

「おかあさん！」

「マスターマスター！」

「ジャック…とナーサリーか。どうしたんだい？」

「このテレビ？だったかしら？凄いわね！色んな場所に落ちてたわ！」

楽しそうにキラキラ笑顔でぴよんぴよん跳ねる二人。子供は可愛いなあ、いや、別に俺はロリコンじゃないからね。

「まあ貞子さんがカルデアの至る場所に置いてるみたいだからね」

「私やジャックのお部屋にも沢山置いてあったの！」

「いっぱいあったから解体したよ」

「看護師さんなんて「殺菌です！」って言つて廊下を走り回つたのよ。廊下を走るなんてお行儀が悪いわ」

ということとは、サーヴァント達や俺の部屋にもブラウン管のテレビがあるって事か。ん？あれ？ってことは…性格に難がある人は怒るんじゃない。ギルガメッシュとかギルガメッシュとか。あと、ギルガメッシュとか。ますます貞子さんが何を目的としているのかが分からない。とりあえず、ダヴィンチちゃんやドクターに報告しないと…。

「魔力で構築された特殊な小型のテレビねー。私の部屋にもいつの間  
にやらあったから何個か分析の為に分解してみたんだ。そしたら面  
白い事がわかったよ」

「分解したの!？」

「フッフ、もちろんだとも！私を誰だと思ってるんだい？万能の才人、  
レオナルド・ダ・ヴィンチだよ？こんな研究しがいのある代物を目の  
前に我慢なんてできないさ」

だからって部屋の中を本やら謎の部品やらでぐちゃぐちゃにする  
のはどうなのかと俺は思うんだけど。

「このテレビは魔力で構築された極めて複雑な構造でできている。同  
時にサーヴァントから魔力を吸収して自分のものとする性質がある  
事がわかったんだ」

「魔力を吸収…？」

「それだけじゃないよ。このテレビには映像を観た者に特殊な“呪い”  
を付与する効果も備わっている事がわかった。何の映像なのかま  
ではまだ特定できてないし、この呪いについても不明な点が多くて  
ね。私も解析できてないんだ」

こちらが質問する暇も与えないくらいに、早口であれこれ説明する  
ダヴィンチちゃん。話に全くついていけないよー！あれはもう完全に  
親から新しい玩具を貰って喜んでる時の子供の顔だ。全身からキラ  
キラのエフエクトが幻で見える見える。

魔力を吸収？

特殊な呪い？

そんなの素人の俺には何一つ理解できないよ…。

「……………」

薄暗い廊下をユラユラ歩く1つの人影。先程まで眩いばかりの明  
るさで辺りを包んでいた照明は今は何故か弱々しい。そんな人影に

近付く二つの影があった。

「よう、髪の毛長いねーちゃん。聞いたぜ。あんた、この施設中にヘンテコなテレビを置きまくってるらしいじゃねーか。この廊下の暗さもねーちゃんの仕業かい？」

「槍を担ぎながら何をそんなに警戒してやがるんですかこの駄犬は。まずは自己紹介が先でございませう？」

「駄犬じゃねーよー！自己紹介ねー…。それもそうか。俺はクーパーリン。間違ってもこの駄犬みてーに犬なんて呼び方はするんじゃないぞ」

「シヤラップ！誰が駄犬ですか！…ゴホン。私は玉藻の前と申します。以後お見知りおきを。おや？貴方様の気配…。んー、妙ですねえ。霊基がちぐはぐ過ぎると申されますか…これはウイルスと怨霊の融合？いやいや、そんなまつさかあ。だってこれは余りに…」

「……………」  
ユラユラとゆっくりとした動きで二人に迫り来る。長い髪に覆われたその隙間からは、鋭い眼がギロリと二人を睨み付けている。

「あ、あれ？もしかして私、彼女にとつて触れてはいけない地雷とか踏んじゃったりしちゃいましたか…？」

「さあな。地雷かどうかは知らんが、あちらさんはやる気満々なのは確かだぜ。お手並み拝見と行こうじゃねーか！」

クーパーリンが待ってましたと言わんばかりに肩に担いでいた槍をクルっと一回転させ、獲物を見つけた鷹のような好戦的な目つきで戦闘態勢に入る。

「……………」  
鈍い動作から一変して、裸足で勢いよく廊下を駆け出しー

「……………」

派手につまづいてコケた。

「「え？」」

## 4話

「はっ？」

カルデアの廊下に響き渡る空虚な声。その声を発したのは全身青  
タイツの槍使いのサーヴァント。真名はクー・フリーン。ケルト神話  
では一位二位を争う大英雄の一人。

粘り強い戦術を得意とし、その槍から放たれる神速の一撃は狙った  
獲物を逃がさない。

「……」

うつ伏せのまま体をピクピクと痙攣させて倒れ込むのは、新しく召  
喚されてやって来たアヴェンジャーのサーヴァント。真名は山村  
貞子。

顔を覆い尽くすボサボサの長い黒髪と奇妙な動作、真っ白い白装束  
が特徴的で、言語能力が失われているのか何を語りかけても「ア、ア、  
ア、ア、ア」としか返さない謎多き不気味な女性。

「ンだよ。これから殺り合うって時にそりゃねーだろうよ」

「殺り合うって…こんな狭い廊下で戦う気だったんですか貴方は!?  
はぁー、これだからバトルジャンキーは…って、そうじゃなくて。あ  
の、もし?大丈夫でございます?」

ガツクリと大袈裟に肩を落とすクーフリーンに辛辣な言葉を投げ  
掛ける青い和服と狐耳の女性。キャスターのサーヴァントで真名は  
玉藻の前。

日本三大妖怪と名高い九尾の狐。型月の最強生物の一角で、彼女の  
本来の個体能力はもっと凶悪なもので、「悪霊」として召喚された場合  
は百の英霊すら軽く退ける大化生となる。

「……」

無言。

「ダメだ。完全に伸びてやがんぜ。オイ、駄狐。お得意の呪術で何と  
かならねーのか?魔術師だろお前」

「無茶言うんじゃねーですよ!いいですか、そもそも私は魔術師じゃ

なくて呪術師ですからね!?じゅ・じゅ・つし!勘違いしないでくださいま——」

「……!」

全身が痺れるような奇妙な殺気を感じ取ったクーフリーンは、素早く背後を振り返り、器用にも片手で槍を旋回させた後、徐に持っていた槍を貞子に向かって突き立てる。

が、両手であっさりを受け止められてしまう。

「んな……瞬間移動で背後に現れたですとお!」

「はっ、素手で受け止めるかい!やるじゃねえか……!」

本気の一撃ではないとはいえ、自分の攻撃をいとも容易く防がれたのが意外だったのか、愉快そうに嗤うクランの猛犬。彼の闘争本能を刺激するには十分だった。

槍を引き戻そうとするが……。

「(この女……!どんな怪力してやがんだ!?全く槍が動かねエ!)」

か細い腕の何処にそんな力があるのか。クーフリーンが槍を左右に振ろうが前後に引こうがビクともしなかった。

「イイねえ。気に入ったぜ。前髪で顔を隠したねーちゃんよ、あんた何者だ?」

「……」

何故いきなりそんな事を聞くのか?そう言いたげに首を傾げる貞子。

「(おや……?彼女、もしかして……)」

一方の玉藻の前は、貞子が一向に行動を起こさない事に疑問を感じていた。やがて何かに気付いたのか顔をハッとさせる。

「瞬間移動たア面白い芸当だが、戦闘に関してはずぶの素人みてえだな」

どんな状況でも冷静に対処する。それが戦士としての在り方だ。だからこそ——彼女を心配しながらも、注意深く彼女を観察していた。なのに、一体いつの間に気配も無く背後に立っていたのか。

しかし、クーフリーンに動揺した様子はない。何故か?それは、豊富な戦闘経験のある彼には直ぐ予想出来たことだったからだ。

「槍から手を離さねえなら…無理やり奪い取ればいいだけの話しよ」

愛用の槍から手を離れたクーフリーンは軽く地面を蹴って後方に跳んで貞子から一度距離をとる。

「……………」

貞子の手にあつた槍が淡い光を放ちながら瞬く間に消失していき、クーフリーンの手に戻っていく。

突然持っていた槍が消えた事に驚いたのか、自分の両手を開いては閉じてを繰り返している。

「はいはい、ストロップ！何で1回お開きムードになったのにまた一触即発の空気感漂わせてるんですか！そんなに戦いたいならトレーニングルームで思う存分やってくださいまし！」

両手をパンパンと鳴らして中断を促す玉藻の前。廊下で戦闘など迷惑以外の何物でもない。カルデアのスタッフやマスターにでも見つかればとんでもなく大事になるのは目に見えていた。

「ああ？何だ駄狐。このねーちゃんの肩持とうってか？」

「肩を持つも何も、最初から彼女は戦う気なんてこれっぽっちもありませんよ。…ね、それで御座いませう？」

「……………」

コクコクと頷く貞子。

戦闘の意思がない。それが分かっていたから玉藻の前は事を見守るだけだった。なら…、クーフリーンが先程感じた肌がヒリつく様な殺気や背後に立っていた理由は何なのか？

「なあ…」

目 ミ ル ナ

「……………」

理由を問いただそうとするクーフリーンだったが、突然聞こえてきた誰かの声に息を呑む。思わずといった風に隣に立つ玉藻の前の顔を見るが、怪訝な顔をしながら「どうしました？」と聞いてくるだけであつた。

「(何だ今の…。幻聴か？確かに聞こえた筈だが…)」

自分達の目前でユラユラ揺れていた貞子は片手をヒラヒラと降つ

て忽然と姿を消した。

ピピピピピピ!!!

けたたましく鳴り響く目覚まし時計のアラーム音に起こされる。騒音の主を止めようと左手を彷徨わせる。枕のすぐ真横に置いた為、左耳の鼓膜がぶち破られたんじゃないかと錯覚する程に痛い。まだ耳鳴りがしてる…。

起き上がって欠伸を一つ。

朝のミーティングまではまだ時間もあるし、軽くシャワーでも浴びてくる…：フア!?

「アッアッアッアッアッアッ」

「うわ!?ビツクリしたあ…：さ、貞子さん?」

心臓の鼓動が大きく跳ねる。

布団のすぐ側に、貞子さんが俯きながら棒立ちにしていた。…一体いつからソコに立っていたのか。

「一体どうやって…：ストーカー防止対策で鍵を何十にもつけていて、その上にキャスターのサーヴァント達に協力してもらって作った特殊な術式を組んだ防犯装置、通称『侵入、ダメ絶対くん』の目を掻い潜る何て不可能な筈なのに…：」

無理やりこじ開けようとすれば、ダヴィンチちゃんお墨付きのサーヴァントでも耐えきれない高圧電流と、エクスカリバー砲が発射される仕組みになっている。一体全体どういう原理で作られているのか全く分からないけど。でも、この防犯対策のお陰で、最近はぐっすり快眠の2点セットで安心して夜を過ごしていたのも事実。

馬鹿な…。溶岩水泳部でも攻略できなかった扉を『怪我もせず』に

一瞬でだつて…？貞子さんの侵入スキルの方が上だと言うのか。

「(そんな友達の家遊びに来ました、みたいなノリで簡単に侵入できる筈がない…)」

「アッアッアッアッ」

「あの、貞子さんってどうやって部屋に入って来たの？」

聞かずにはいられなかった。

数秒ほど沈黙を貫く貞子だったが、扉の方を指差す。

「へ、へえー。扉か。その扉は色んな防犯トラップが仕掛けられてるから危ないと思うけど…。大丈夫だったの？」

「アッアッアッアッ」

多分「うん♪大丈夫だよ♪」って言いたいのかな？…いや、待てよ。人類に激しい憎悪を抱いてる彼女なら「おはよう。そしてさようなら」なんて俺の寝首を掻きに来た可能性も…。

だ、大丈夫だ。俺は彼女のマスターなんだ。俺が彼女を信じなくてどうする。さあ、その尊顔を俺に見せてく…：すいませんやっぱまだ大丈夫ですごめんさい。お願いだから睨むのはやめてくださいしんでしまいます。

ふと、部屋の扉を誰かにノックされる。

「<sup>マスター</sup>司令官、おはようございます」

まさか…こゝ、この声は…：婦長お!?



## 5話

人間に凶害を受け、人気のない古井戸の底に捨てられ息絶えた可哀想な女よ。

この世に恨み抱く——が——何故に人類に手を差し伸べる？我らが怨恨、我らが怒り、やもや忘れた訳ではないだろう。

愚か愚か愚か愚か愚か愚か。

忘れないで——忘れるな。

私は人に在らず。怪物が手にする幸福など、この現世の何処にも存在はしない——

\*\*\*\*\*

「(どうして婦長がつ!?)」

婦長が訪れて来た事に驚きを隠せない立香。

「ふ、婦長ー？おはよう。どうしたの？こんな朝早くに」

「これからミーティングを行うので速やかに行動するようにと、ミスター・ロマニからの伝言です」

「ロマニが？わかった、直ぐに準備して行くって伝えておいてくれるかな？」

「承りました。ところで：傍に誰かいるのですか？」

心臓が大きく跳ねる。深呼吸をして平常心を保ちながら「どうしてー？」すつとぼけながら婦長に尋ねる。

だ、大丈夫だ。まだバレてない。ここで戸惑ってしまえば確実に気付かれるだろう。

「部屋の中から物音が聞こえましたので誰かいるのかと。：本当に

傍には誰も居ないのですね？」

「う、うん」

「であるならば、今すぐ扉を開けてください。貴方の健康状態をチェックしますので」

「え？いやー、それは困ると言うか…」

「開けなさい」

「はい…」

扉越しでも伝わってくる婦長の物言わせぬ威圧感に押され渋々扉のロックを外す。

スライド式の扉が横に開く。そこには無表情のナイチンゲールが立っていた。右手にはクリアファイルが握りしめられている。

「寝癖が付いているわ。きちんと身なりは正すように」

「き、気を付けます」

「心身ともに異常なし。至って健康そのものですね」

婦長が持っていたクリアファイルに挟んでいる用紙にペンを走らせ何かを記入している。大方俺の体に異常がないかチェックしているのだろう。

「司令官、これは貴方の物ですか？」

婦長が指を指す方角——そこには設置した覚えのない『井戸』がソファの隣に当たり前のように置いてあった。どす黒く変色しており、かなり年季が入っている。

「(何だこれ…こんなの俺は知らないぞ。一体誰が…まさか)」

彼女以外にこの井戸を設置する人物が思い当たらない。だが、何の為に…？

「違うよ。貞子さんの私物じゃないかな。参ったな…。一体いつの間にかこんな物を…」

「駄目…駄目駄目駄目！それはこの世にあつてはならない『汚毒の塊』です。清潔を保つ為にも、早急に殺菌しなければなりません。——緊急消毒を開始します」

鬼気迫る勢いでツカツカと井戸に歩み寄り、いきなり鞆からアルコールスプレーを取り出す。

「は？いやいや、待って！待って！婦長ストップ！」

勢いそのまま手当り次第に井戸を殺菌するクリミアの天使を慌て止める。

「…何故邪魔をするのですか？」

一分一秒でも時間が惜しい。早くそこを退ける。と目線で訴えてくる。表情こそ無表情ではあるが、目の奥からはプレッシャーにも似た強烈な凄みを感じて怯みそうになる。はつきり言って怖い。

「じゃ、邪魔って…。婦長がいきなりアルコールスプレーを井戸に撒き散らすからビックリしたんだよ。少し落ち着こう…うお!?」

「先程言っただけです、これは汚毒の塊だと。くっ！その手を離しなさいっ！」

「絶対嫌だっ！ふんぬううううあああああ！」

婦長、力強ええええええええええ!?只でさえ説得するなんて困難なのに、今日は一段とヒートアップしてる気がする。

「アッアッアッアッアッ」

「さ、貞子さんんんん！今すぐ井戸を撤去して！俺が食い止めてる間に…！」

騒動を聞き付けてか、井戸からひよこっつと顔を出す貞子さん。

「ああ——いけない。いけないわ！ミス・貞子。貴女は私にとって『天敵』という言葉すら生ぬるい存在です。率直に申し上げますと、不愉快極まる…と言わざるを得ません。ですが、大丈夫…。ええ、大丈夫ですとも。要治療対象を見捨てたりはしない。私が貴女を必ず救ってみせます。貴女の命を奪ってでも」

「アッアッアッあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”」

「…！待ちなさいっ！」

それ以上の言葉は聞きたくない。聞くつもりもない。と告げるように井戸の中へと戻っていく。

彼女を引き止める為に急いで井戸へと駆け出すが、それよりも早く井戸の存在自体が幻のように消えていった。

\*\*\*\*\*

自室に設置されたシャワーを浴びながら貞子さんと婦長について考える。あれから、貞子さんは何処かに姿をくらし、婦長は貞子さんを探しに俺の部屋を飛び出して行った。

婦長は奉仕と献身を信条とする信念の人だ。傷病人を見つけたら「とりあえず治療させろ」と脅し、何にいてもせつかちで力任せ。

やると決めたら全力かつ実力行使で、自分が傷つこうが、病人を背負って戦おうが、歴戦のサーヴァントすら怯む殺気をあてられようがお構いなし。

彼女にとって怪我は絶対的な悪そのもの。殺してでも治療する。治療を妨げる者には死を。清潔と衛生を保つこと、完全殺菌こそが彼女の喜び。

一方の貞子さんは一言で表すならウイルスそのもの。人間の欲望によって理不尽にも人生を無茶苦茶にされ、人類を憎悪する彼女がどうして人類を救済しようとするのか？

前回も言ったが、アヴェンジャークラスのサーヴァントは癖の強い、また人間嫌が多いと聞いたことがある。貞子さんも例に漏れず、人類に怨みが有るからこそ、こうしてアヴェンジャークラスで現界したのでろう。

「……………」  
ただの気まぐれか？それとも明確な理由があつて俺達に手を貸さうとしているのか。

「……………」  
「さ、貞子さん!?!ちよ、は?何でここにいるの!?!」

素っ裸で叫ぶ俺は悪くない。考え事に集中していてまるで気が付かなかった。どうしていつも人の背後に姿を現すの…?てか、俺シャワー室に鍵掛けたよね?何でナチュラルに侵入してくるのさ。

余談になるが、この自室に設置されたシャワー室は所謂マジックミ

ラーになつており、外からは中の光景は見えない作りになっている。これなら透明でも恥ずかしがらずに安心してシャワーを浴びられるね！貞子さんには簡単に突破されたけども！

ははっ、泣いていいですか…？

「……」

シャワーの水が当たったのか、彼女の長い黒髪はしっとり濡れている。それに加えて、身に付けている白装束も所々が透け透けになっていて女性の特徴的な部位が露わになっているのだが、気にした素振りは一切見せない。

差し出された右手の中には白い長方形の物体があった。

「へ？石鹸？わざわざ届けてくれたの？あ、ありがとう…。貞子さんも髪の毛拭いたほうがいいよ。ほら、これ使つていいからさ」

下半身をタオルで隠しながら近くにあった白いバスタオルを背後にいる貞子さん渡す。

「あとその…。色々透けて見えちゃってるから、着替えた方がいいかも…なんて。俺の予備の制服でもいいならクローゼットの中に有るから自由に使つて」

「……」

「後ろは見るな後ろは見るな後ろは見るな後ろは見る…ん？あれ？」

ふと、天啓のような閃きが頭の中を過ぎった。

「(マテリアルに書いたあつたけど、貞子さんつて両性具有なんだっけ…)」

両性具有とは男女両性を持つ人のことを指すもので、男性仮性半陰陽とも呼ばれている。

それならば変に意識する必要ないじゃん、と下心丸出しの悪魔が俺に囁いてくる。

いやいや、確かに貞子さんはめっちゃいい匂いするけど、ここで俺が行動を起こせば確実に事案だからね。貞子さんが人睨みすれば俺なんて簡単に殺せるって事を忘れてはならない。

「貞子さん…?」

自尊心と葛藤で板挟みになっていると、背後からの絡み付くような威圧感が消えていた。

シャワーから零れ落ちる水滴がやたら大きく俺の耳に響き渡る――

\*\*\*\*\*

「…?何よ、このヘンテコな箱は?」

「私に聞かれても…。私も初めて見ました」

「フフン。白い私も黒い私も知らないんですか?これは“テレビ”ですよ。トナカイさんから教わりました」

ジャンヌ三姉妹が食堂の片隅にひっそりと無造作に置かれているレトロ感漂うテレビに釘付けになっている。

自慢げに胸を張るのはジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ——マスターや一部のサーヴァント達からは『ジャンヌ・リリイ』と呼ばれ可愛がられている。

「これが…テレビ?休憩室にある物とは形も大きさも違うわね。で、それが何で食堂の片隅に置いてあるわけ?」

「それは私にもわかりません!」

「嫌いわね!自信たっぷりになうなつての」

「貞子さんが置いていったのさ。私としては食堂に余計な荷物を置いては欲しくはないのだがね」

話を聞いていたのか、厨房から顔を出したエミヤが答える。

「…貞子さん?どなたですか?」

「マスターが新しく召喚した日本出身のアヴェンジャーのサーヴァントだ。最も、彼女が実在するとは私は思っても見なかったが」

「ふーん、アヴェンジャーねえ。私と同じクラスなんて生意気じゃない。一度顔でも見に行つてあげましょうか」

「何処に対抗心を燃やしてるんだ、キミは。下手に刺激して呪われな  
いよう気を付けたまえよ」

「呪い？それってな「ぎゃあああああー！」」

悲鳴をあげながら食堂に滑るように駆け込んでくる人物によって、  
ジャンヌオルタの達の会話は強制的に中断させられる。

「あの方は…刑部姫さんですね。何やら顔が真っ青ですがどうしたん  
ででしょうか？」

入口近くの席で茶を飲んでいたアンデルセンが「喧しいぞ。人様の  
憩いの時間を邪魔するな。鬼めっ！」と静かに元凶の人物に刺々しい  
言葉を投げ掛けていた。

思い思いの場所に座り、食事を楽しんでいたサーヴァント達も何だ  
何だと入口に釘付けになる。

「うわあーん！<sup>わたし</sup>姫の部屋に幽霊が出たー！」

「幽霊？食堂で何をギャーギャー喚いているのよ貴女」

同時刻に偶然食堂に来ていたエリザベートが刑部姫に話し掛ける。

「<sup>わたし</sup>姫の大型タブレットから髪の毛の長い女が這いずり出てきたの！事件よ  
事件！今だって高速移動して追い掛けて来たんだから！」

「寝言は寝て言うがいい。脳みそに泥でも詰め込んだようなくだらん  
妄言など執筆のネタにもならん」

「辛辣過ぎ！？本当なんだってば！信じてよー！ー！！」

刑部姫の涙目の訴えが食堂全体に木霊する。妄言と思っっているの  
はアンデルセンだけではない。話し掛けて来たエリザベートでさえ、  
「何言ってるんだこいつ」とまるで可哀想なものを見つけたような表情  
をしている。

## 6話

山村貞子の超能力は魔術師から見れば証明できない——異能そのもの。彼女の『予知能力』は毒薬であり良薬でもある。

突き動かされる復讐心に身を委ねた結果、恐怖を生み出す怪物へと成り果てた。

サーヴァントになった今、霊基が不安定な状態のまま召喚されたことで、自分に予知する力があつたのか。それすら記憶が曖昧な状態だと言うことを、彼女自身は知らない——

\*\*\*\*\*

私は、別に殺人鬼になりたい訳じゃない。呪うことは手段であつて、目的とは違う。私は——子供が欲しかった。自分の子供を。なのに、何故——私は——幸せになりたかつた。

異端者は淘汰されなければならないのか。私と同じ特殊な力を持ったお母さんが投身自殺したのだから、あの実験場に居たマスコミの人間共がインチキだ何だと騒ぎ立てたせいだ。

そうじゃなければ、私のお母さんは狂うことも自殺することもなかった。

——許せない。

あのマスコミも。私に性的暴行を加えた拳句、私の秘密を知り古井戸に突き落として私を殺したあの医者も。

——認めない。こんな世界は絶対に認めない。世界は理不尽という悪にまみれてる。

『山村貞子の遺体を、古井戸から引き上げて供養すれば、呪いは解ける』



——ふぎけるな。

ふぎけるなふぎけるなふぎけるな！

私の憎しみが。私の怒りが。私の悲しみが。私の嘆きが。そんな思い込みと偽善だらけのくだらないモノで、私の呪いが解けてたまるか。

人類の危機など知ったことではない。私を受け入れてくれない世界など消えてなくなってしまえばいい。人間など存在してはいけない生き物だ。信用しても何れ最後には裏切られる。

ならいつその事、人類を私だらけにしてしまえば誰も私を裏切らないのではないか？それならこんな悲しくなることもない。不安になることもない。

『貞子さんと仲良くなるにはどうすればいいのかな…』

——藤丸立香…

私と変わらない歳の子供が世界を救う為の希望なんて…。あまりに重荷が過ぎる。たった一人で背負いきれないほどの責任を押し付けられた可哀想な人。不安と恐怖に押し潰されて立ち止まるのが先か、全ての責任から逃げ出して全てを諦めるのが先か。

理由はどうあれ、私の姿を見た者には呪いをかける以外ない。貴方が呪いで倒れるその日まで——それまで勝手に死なれるのは困る。貴方を全ての苦しみから楽にしてあげるのは私。

『へ？石鹸？わざわざ届けてくれたの？あ、ありがとう…』

その石鹸には私の呪いが念写してある。触れば呪いがお前をじわじわ蝕む——せいぜい呪いの苦痛にのた打ち回るがいい。

『ほら、これ使っていいからさ』

——？

お前は人を疑うことを知らないのか？何故私を恐れない？わからない…何を企んでいる？止める、私に優しくするな、笑顔を見せるな。

呪いが効いてない？

なぜ？

\*\*\*\*\*

シャワーを浴びてる所を貞子さんに突撃訪問されたその後、俺はいつものカルデア指定の制服に着替え作戦会議室へとやって来た。

「おはようございます、先輩」

「やあやあ、おはよう！立香くん。…ん？何やら疲れた顔をしてるみたいだけど、一体どうしたんだい？」

マシユやロマニと話していたダヴィンチちゃんに開口一番にそう尋ねられる。

「ダヴィンチちゃん！本当に俺の自室の扉のトラップって作動するの？故障とかしてない？朝起きたら目の前に貞子さんがいて心臓止まるかと思っただけでも！」

「何だつて？それは本当かい？んー、ちよつと待つててくれたまえ。どれどれ…」

ダヴィンチちゃんが小難しそうな機械を手慣れた操作で弄ると、これまた小難しそうなグラフと数値が現れる。

「…うん。今モニターで故障がないか調べて見たけど、何処にも異常は見受けられないね。ロマニの方はどうだい？」

「いや、こつちも問題と言えるような所はないな…至つて正常だよ」「なるほど、ね」

「これは私の推測だが…」とダヴィンチちゃんが口を開く。その表情は実に楽しそうだった。

「魔術を施した術式を室内から無理やり掻い潜ることで、<sup>彼女</sup>彼はキミの自室に侵入したんだろうね」

人間は疎か、サーヴァントですら侵入は困難とされる術式を——室内から無理やり掻い潜った？

意味がわからない。

そんな事が本当に可能なのか?と、立香が険しい表情のまま、ダ  
ヴィンチの話に耳を傾け続ける。

「彼は超能力を得意とする。念写、予知、瞬間移動と言ったような、科  
学じゃ説明できない超人的な力をね」

「(魔術も科学じゃ説明できない代物だけどね…)」

「ん?ふふつ、魔術自体がオカルトそのもの。とでも言いたそうな顔  
だね?」

「へ?う、うん…」

「実は彼の行動が気になってね、陰から監視…もとい観察をしていた  
んだが…。彼は廊下から離れた距離にあるトレーニングルーム、食  
堂、管制室、各サーヴァント達の自室を瞬間移動で自由に行き来でき  
るんだ」

曰く、青セイバーことアルトリアの自室に無断で侵入して彼女に  
『不法侵入とはいいい度胸ですぬ!そこに直りなさい!』と怒られ。

曰く、メディアの工房に転移して『なっ!?わ、私の工房の侵入者防  
止の罫をいとも容易く掻い潜ったというの?…貴女、一体何者かしら  
?』と、驚かせ。

道中のカルデアの廊下で偶然出会った子ギルには『あなたの中には  
無数のあなたが存在する。あなた自身は気が付いていないかも知れ  
ませんが、何れ、あなた自身を苦しめることになりますよ。…なーん  
て、少しお節介でしたかね?えへへ』と、警告とも助言とも取れる意  
味深な言葉を投げ掛けられる。

「キミが持ち前のコミュニケーション能力の高さで様々なサーヴァン  
ト等と打ち解けるのが得意なことは私も知っている。しかしだね…、  
なんと言うか、キミは…いやたらと山村貞子を気にかけているように  
私は思えるのだが、何か理由があるのかい?」

「気に掛けるなんてそんな…。俺はただ、貞子さんに早くカルデア  
の生活に慣れて欲しいだけだよ」

顔を覆い隠す長い前髪、奇妙な動作、古井戸からゆっくり這い上  
がって来る等、昔ホラー映画で見たあの貞子さんがサーヴァントに  
なつて、しかもそのマスターが自分なんて…。当時の僕は想像すらし

ていなかっただろうな、と考えにふける。

先のシャワーのあの一件…。

本当は根は心優しい人なんじゃないか、なんて都合よく思ってしまう俺は間違っているのだろうか。

「うわああああ!?モ、モニターの中から人が這い出て…!」

「貞子さん!」

「落ち着いてくださいドクター!ほら、深呼吸を。ヒツヒツフリー!」

「それなんか違くないかなマシユ!」

「噂をすれば何とやらだ。やあ、おはよう。まさか液晶モニターからの登場とは…。それもキミの超能力なのかな?」

「……」

\*\*\*\*\*

「貞子さんって不思議な方ですよね」

「藪から棒に。突然なにを言っとるんじや貴様は」

畳に寝転がりながらゲームを退屈そうに遊んでいた黒髪の少女の手が止まる。

「まあまあ。沖田さんの話が聞きたいのは分かりますが、そんなに急かされたら話すものも話せませんってば!」

「いや、わしは一言も何も言つとらんのだが…。というか、それわしが飲もうと思っていたお茶なんじやが!」

「ふっふー!」馳走様です!」

顔を横に向ければ同じく畳に座りながら湯のみに入ったお茶を飲む少女がいた。

片や第六天魔王、織田信長。

片や新選組一番隊長、沖田総司。

過去に殺しあつた仲であり、お互いをライバル視する関係でもあ

る。会えばいがみ合いが絶えない二人がどうして仲良く同じ部屋に一緒にいるのか。実にぐだぐだである。

「それで、話の続きなんですが。昨日のお昼頃に体を動かす為にトレーニングルームに行っただけです。そしたら山村貞子さんが倒れてまして」

「呆れるほどに人の話を聞かんのう」

「これは大変と思ひ、声を掛けたんです。幸い怪我もなく、すぐ起き上がってくれたんですが…」

「それでどうしたんじや?」

話を続けていた沖田の表情が困ったような顔に変化する。

「何故かいつの間にかやら私の部屋の中に行ったり、後ろをよく付いてきてたりするんですよ。私に敵意があるって言うよりは、なんて言うんですかね…こう、此方を観察しているような雰囲気を感じるんです」

「ヤツは…そうさのう。童共と戯れているのをこの間見かけたな。随分と疲れ果てておったぞ」

「それは何とも微笑ましいですね。沖田さんみたいに子供が好きなんでしようか?」

「いや、アレは童共に一方的に振り回されていたーという解釈の方が正しいかも知れん。当人は嬉しそうじゃったがな。ヤツはまあ、なんだ。本音を言えばじゃが。わしはあやつのを高く評価しておるぞ。寧ろ心配なのはーその使い方じゃな」

「使い方?」

「そうじゃ。何じゃ人斬り、あやつの異常性に気付いておらんかったのか?」

手に持っていて携帯ゲーム機をテーブルに置く。寝っ転がった体制から起き上がって座布団に座り直すと、先程の眠そうな表情から一変して真剣な眼差しで「よいか?」と話し始める。

「ヤツはその気になれば、立ち入り禁止区域に嚴重に保管されている聖杯を一瞬で盗み出すこともできるんじやぞ。魔術師でもないのに至る所に瞬時に転移できるその能力は、脅威以外の何者でもなから



## 7話

カルデア内の一室。作戦室と、その略称で呼ばれている部屋の中では重々しい空気が漂っていた。この場にいる全員が作戦室に備え付けてあるモニターを見つめている。否、正確にはモニターから這い出て来た人物に注目していた。

「このタイミングでのご登場とは。自分の噂話を聞いてやってきたのかい？ 山村貞子くん。いや、『さん』と言った方が君は喜ぶかな？」

「……………」

「モ、モニターから急に人が出て来たアアアアア!？」

ロマニが相変わらず大声を上げて驚いている。ダ・ヴィンチが冗談半分で問いかけてみると、モニターから現れた謎の女性は無言のまま室内を見渡していた。

「……………」

「モニターがある場所だったら場所、距離は関係なくどんな所でも移動が可能であるか? ふむ…」

「ダ・ヴィンチさん。貞子さんと会話が出来るんですか?」

「ん? 出来ないよ? 前も言ったが、こういうのは雰囲気さ。何となく言いたいことを理解するのは慣れだよ、慣れ」

宇宙猫のような何とも言えない表情をするマッシュにロマニが「天才の言っている事を真面目に考えちゃ駄目だよ」とフオローする。

再びダ・ヴィンチ貞子へ視線を向ける。だが、先ほどまでモニターにいた筈の彼女が既に消えていた。

「わーなになに貞子さん?! 顔近いつてば!」

立香の驚く声に後ろを振り返れば、貞子が藤丸の顔をまじまじと見つめていた。何かを確認するかのようには観察していた彼女の手が藤丸の顔、胸、心臓へと当てられる。彼女は暫くその状態だったと思うと、ゆっくりと手を降ろして、今度はダ・ヴィンチとロマニ、マッシュの三人を見つめる。

貞子の視線が一人一人と移っていき、最後にダ・ヴィンチへと戻ってきた。そして何か納得したかのような表情を浮かべたかと思うとモニターから出て来た時と同じく、音もなく消え去ってしまった。

「か、彼女は一体何がしたかったんだ？」

「解らない…が、触っている時に微妙に首が動いていたから何かを確認していたのかも知れないな。」

ロマニと会話を続けながらダ・ヴィンチは先ほどの行動を考察してみるのがやはり、貞子が何をしていたのかは皆目見当がつかない。

「先輩、一つ気になっていたのですが…」

「どうしたのマシユ？」

マシユが藤丸に貞子の事について質問をしようと口を開いた。

「貞子さんはエミヤ先輩と同じ日本出身のサーヴァントなんですよ？」

「うん。貞子さんは日本じゃ知らない人はいないくらい知名度が高いよ。貞子さんを知らない人は日本じゃないんじゃない？」

エミヤと同じ日本出身の、そしてあの有名ホラー映画の主役でもある。マシユはその事を言いたかったようだ。

「エミヤくんが驚いた顔で『まさか彼女が本当に実在したとは』と言っていたのも、日本じゃ圧倒的な知名度を誇るが、本当に存在するかは解らなかつたって事なんだろうね」

「召喚されるまでは俺も貞子さんはフィクションの中だけの存在だと思ってたから、開いた口が塞がらなかつた」

ダ・ヴィンチが先ほどのエミヤの言葉から、彼が貞子の事を日本出身のサーヴァントだと思っていた事の推理をする。

ダ・ヴィンチの言葉にマシユも頷く。

「加えて言うなら、山村貞子について私なりに調べてみたんだが、結果は惨敗。逸話も、伝説すら全くもって出てこなかつた」

山村貞子という人物は実在したのか、実在していたとしたらいつ、何処の時代に生きていたのかすら不明という始末であった。マシユが貞子についての情報が出てこなかつたことに驚くのを横目に、ダ・ヴィンチは再び口を開く。



「人理焼却というイレギュラーな事態でもなければ召喚すら叶わなかったサーヴァントだろうねえ」

「カルデアの召喚式は特殊ですからね」

召喚式というのは通常、その土地と縁を結んだ上でサーヴァントが召喚されることが多い。呼び出したいサーヴァントがいるならそのサーヴァントに関連する触媒を用いて召喚を行う。

だが、このカルデアの召喚式は、通常の召喚式とは違い、場所や縁に左右されずあらゆる英霊の召喚が可能となっており、それはこのカルデアで召喚が可能な存在なら、あらゆる英霊の召喚が可能となっていることを意味するのだが、それ故に『能力値の高い英霊を呼び出せる確率は、宝くじの一等を当てるよりも低い』という、とんでもない代物でもあるのだが。

カルデアでは人理修復の為に多くの英霊達の協力を得るために召喚を行っているが、協力を得られるかどうかは召喚後の行動に委ねられている部分が多い。

反思の持ち主は召喚から除外される仕様になっているとはいえ、召喚式自体がまだ未完成な部分が多い。逆に言えば、未完成な部分が多い故に、英雄王や騎士王といった強力な英霊を呼ぶことも可能だという話である。

しかし、レフ・ライノールが引き起こした爆発事故で半数以上のスタッフとマスターを失いながらも、藤丸はこの召喚式を用いて、多くの英霊達を呼び出すことに成功した。

全てはこれからである。



カルデア内に設置された食堂は、日中は多くの人で賑わっている。手軽に食べられる物を自動販売機で購入したり、または自分の食べる分を調理して貰ったりと人それぞれである。

エミヤが食堂スタッフとして働いてからは、日本人の英霊が増えた

のもあり、日本の料理を頻繁に出すようになり、その影響もあってか今ではエミヤが居る食堂はいつでも満席だ。

時刻は19時を回ったが夕飯を取りに来る者達で賑わっていた。既に夕食を食べ終わったエミヤは、明日の朝食の仕込みを始めていた。厨房には未だ残っている皿や鍋が大量にある。それらを洗う事自体は彼にとっては苦ではない。

「よう、弓兵。俺にも何か食わせてくれ」

人理修復に協力してくれている一人の英霊、キャスターのクーフーリン。彼が厨房へと足を運んで来た。

「クーフーリンか。生憎と食材は切れている。何が良いんだ？」

「適当に美味しいの頼むわ」

「フツ、了解した」

彼が食べたらしい物をエミヤが質問してみると、厨房の冷蔵庫を物色し始める。そして一通りの食材を確認し終えてから、口を開いた。彼の視線は冷蔵庫では無く、壁に掛けられているカレンダーを眺めている。

「なあ、その厨房の隣に置いてある変なモニター？みてえのは何だ？

邪魔じゃねーのかこれ」

「ああ……これか。貞子さんの私物だ。彼女に退かすように頼んではいるんだが、一向に言うことを聞いてくれなくてね」

「あ？貞子さん？誰だそりゃ」

「黒髪で長髪の猫背気味の女性をカルデアで見たことはないか？」

「あー、そういえばさつき金ピカに絡まれている猫背で黒髪の女がいたな。あいつがその貞子さんって女なのか？」

「……英雄王に絡まれていたのか？」

「ああ」

貞子さんは大丈夫だろうか……。と考えながら、エミヤは冷蔵庫から食材を取り出して調理を始めていく。鍋が煮立ち始めた頃、食堂の入口である自動ドアが開き、一人のサーヴァントが入って来た。

「はあ……」

露骨に大きな溜め息を吐いたメイドアがカウンター席に座った。

「キヤスターか。キミも何か注文するか？」

「紅茶を一つお願い」

エミヤがメディアに声をかける。

メディアはキヤスターのクラスなので、当然の事だが、ある程度の魔術も扱える為、戦闘面では頼もしい存在でもある。しかし、今日の彼女は目に見えて疲れた表情をしていることがエミヤには気がかりであった。

見た感じ、魔力を消費している訳ではないが、肉体面よりも精神的に疲れているようにも見える。

「何かあったのか？かなり疲れた顔をしているが…」

「黒髪で長髪のミステリアスな女性がいるでしょう？確か貞子さん、

だったかしら」

「彼女がどうかしたのか？」

「あの子、一体何者なのかしら…。私の工房にいつも容易く侵入してくるなんて。どれだけ術式を変えても、何故か必ず突破してくるのよ…。はあ、全くもって忌々しいつたらないわ」

心の底から疲れきったような声でメディアは答える。彼女の口ぶりから推測するに、どうやら何度か侵入を防ぐ罫を設置してもあっさり突破され、躍起になって改良に改良を重ねてはいるものの、未だに成功したことが無いらしい。

「噂で聞いたけど、あの英雄王の部屋にまで侵入したらしいじゃない。本当に何が目的なのかしら…。彼女は」

「あー、なるほどな。金ピカがあの子に絡んでた訳つてのはそれが原因か。ははっ、野郎に喧嘩売るたア中々肝が座った嬢ちゃんじゃねーか」

三つ開けた席で二人の話に聞き耳を立てていたクーパーリンが唐揚げを頬張りながらケラケラと愉快そうに笑う。

どうやら、エミヤに話しかけた時の反応で何かを察したらしい。メディアに軽く断りを入れてから唐揚げと箸を手に持ち、彼女が座っているカウンター席へと移動した。

## 8話

「槍の俺から聞いたが、戦闘能力こそずぶの素人みてえだが、名の知れた英霊にも引けを取らない殺気を放つらしいじゃねーか。あと、めっちゃおっぱいデカくて、スタイルも良いって聞いたぜ」

「どうやら、この話題に彼も加わりたかつたらしい。その口ぶりがあるを語っていた。」

「ほう、彼女がか……。それと、キャスターのクーフリーン。食堂でそういうセクハラ発言は止めてもらおうか」

「なんだよ弓兵。てめえは気にならねーのか？女の乳とスタイルよオ」

「気にならないと言えは嘘にはなるがね。勿論、私が気にしているのは彼女のスタイルではなくて様子だが」

「素直にセクシーボディが気になるって吐けよ。むっつりスケベ野郎」

「な！誰がむっつりスケベだ！」

「貴方達。此処でそういう話は止めなさい」

二人の言いように呆れ、溜め息と共にメディアが言葉を挟む。メディアもクーフリーンに同意する部分もある為、黙って話を傾けていたが、この話題については早く切り上げた方が得だと思い、止めに入ったのだった。

「ん？なあ、何か妙な気配感じねーか？」

「妙な気配？」

「この心臓を鷲掴みされた様な悪寒――噂のあの子よ。何度もこの身体感してるから間違いないわ」



カルデアのとある廊下では戦場の真っ只中ではないかと勘違いする程の殺気と重圧が充満していた。

「貴様……。私の神殿に許可も無く侵入するとは、余程その命が惜しくないらしいな？この凡愚が！恥を知れ！」

「……………」

そんなお怒りの声を漏らしたのは、金ピカの英雄王。改築に改築を施した自慢のマイルームに突如として謎の古井戸が出現。

その中から姿を現したのは呪いのエキスパート、山村貞子だった。

彼女は何故ギルガメッシュが怒っているのか解らない、といった表情で首を傾げていた。

「貴様！よもや自分が何故怒られているのか理解しておらんのか？くっ、幻霊風情が！何処まで我を愚弄して…いや、待てよ？幻霊。そうかー幻霊か。フツ。ハツハツハ！良い、良いぞ女。その首を刎ねるのはまだ後だ」

「……………」

彼女はギルガメッシュが一人で笑い始める様子を、無言のまま見つけているだけである。そして笑い終えた後すぐに、彼は彼女に向き直り、こう言い放った。どうやら彼女に対して見せていた怒りの感情は消え失せてしまったようだ。

変わりに英雄王の心は好奇心の色に塗り替えられた。

「貴様、人類悪ビーストに成る器か。只の幻霊風情と思っていたが、どうやら訳ありの様だな。大方、座に無理やり登録され霊基も幻霊同士が融合した奇特な状態のまま召喚された、と云ったところなのだろう。貴様の中に様々な気配を感じる所を見るに、貴様は怨霊の集合体か？…どちらにしろ、興味深い存在よな」

「……………」

「本来、貴様はこ味ちら方側ではなくあ敵ちら側の存在だ。人理に手を貸すように唆されたか？それとも此度の召喚は貴様らの意思か？」

「……………」

貞子が血走った眼差しでギルガメッシュを睨み付けるがー

「フン。我に魔眼の類いなんぞ通用せん」

「あの、俺には思いつきり効いてんですけど！つーか、何で俺アずつとこんな役回りなんだっつもの！あの女と関わると本当にロクな目に合わねえ！」

偶然廊下を通り過ぎようとしていたロビンフッドが棒立ちで固まっていた。どうやら貞子の顔を直視した事で硬直してしまったらしい。

彼が何故、こんな場所にいたかと言えば、単純明快で小腹空いたから食堂に向かっていただけ。あまりにも不憫である。

「……………」

体を左右にユラユラと揺らしながらゆっくりとギルガメッシュへと歩き始める貞子。その目は怒りに満ち溢れていた。だがそれはギルガメッシュに対してではなく、自分自身へのものであるらしい。

だが、彼女は気付いていないのだろう。自分が今、何に対して怒っているのかをーー 彼女が一步踏み出すたびに空気がビリビリと震え、床には亀裂が走る中、ロビンが必死に彼女を止めようとする。

「止めるな、雑種。こやつ力の一端、この目にしかと焼きつけようではないか！くく、面白い。我を飽きさせん娘よな」

ギルガメッシュの言葉などまるで聞こえていない様にロビンを無視して、彼女の進行は続く。

ロビンが彼女の進行を止めることはもう不可能であろう。だが、せめてギルガメッシュの興味を削ぐためにも、貞子を止めるという行為自体は無駄では無いのかもしれない。

いや、もしかしたら無駄になる可能性の方が断然高いのだろうがー。

「……………」

貞子の髪の毛がみるみるギルガメッシュへと一直線に伸びていく。彼女の髪の毛は伸縮自在。髪の毛の射程範囲まで、貞子は既に歩みを進めてている。あと一步でも踏み出せば、彼女の髪が容赦なく襲い掛かってくるだろう。

ギルガメツシユはそれを解つていながら微動だにしない。余裕の表情でただ、じつと貞子を見つめていた。

貞子の艶のある長い黒髪が触手の様に、ギルガメツシユの両手、両足に蛇の如く絡みついていく。髪の毛が彼の顔を覆い隠すその瞬間——バチバチイッ！と何かが弾けた様な音が廊下に響くと同時に、絡み付いていた髪の毛が爆ぜた。

「誰の許しを得て我に触っている？無礼者が。そら、足枷をくれやろう。精々足搔いてみせるがいい。フハハ！」

「……………」

ギルガメツシユの周りに立ち込める空間がぐにやりと歪み彼の両隣から幾つもの鎖が飛び出す。それが凄まじい速度で貞子の体を拘束したかと思うと、そのまま床に押しつけて動きを封じた。

「自慢の髪で拘束を解いてみるか？それとも自力で鎖を引き千切るか？好きな方を選ぶがよい。まあ、雑種如きに天が鎖を解けるとは到底思えんがな」

身動きを封じられた彼女の目の前で腰を下ろしたギルガメツシユが、ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべて口を開く。貞子は自らの髪に念を込めた後、力を使ったり自身の念力を爆発させようとしたのだが……全くもって体に力が入らなかったのである。

「どうやら完全に動きを封じられてしまったらしい、と判断した彼女は——再び血走った眼を自身を拘束する鎖に向けられる。

すると——

「…………ほう。あの拘束を解いてみせる、か」

「……………」

ギルガメツシユが貞子に向けて、面白そうに微笑む。それに釣られてか、彼女が纏う殺気が一層強さを増していた。床を這う髪の毛からは、怒りとも違うドス黒い負の感情が溢れ出していく。

貞子が力を込めると同時に、彼女の拘束は再びバチバチと弾け始

め、先程とは比べ物にならないスピードで彼女を取り巻く鎖が弾けていったのだ。

「ん？何だそれは？」

「……………」

貞子が徐に右腕を上げて手の平をギルガメツシユに見せつけた。『待て』とも取れるポーズだが、彼女の殺気は変わらず増した状態。

手の平に小さな光が収束して行き、それは次第に大きくなっていく。ギルガメツシユは興味深そうにそれを観察するだけだ。彼女の放つ殺気には微塵も物怖じしていない。

そして、その圧縮された光が一瞬大きく煌めいたかと思うと、——忽然と彼女の姿が消えた。

「空間跳躍か？小賢しい真似を——」

「……………」

「なっ!?おのれ……！瞬間移動か!」<sup>テレポルト</sup>

「気を付けろ金ピカ!あいつはマスター曰く『超能力』を得意としやがんだ!」

「それを先に我に伝えんか馬鹿者め!ぬっ!」

近距離まで接近した貞子は、右手掌をギルガメツシユの腹部に当たった。

《呪い》

呪いの文字が浮かび上がると、その掌に凄まじい念が収束されていくのが解る。そしてそれはそのままギルガメツシユの体を勢いよく吹っ飛ばした。

「なにイ!?おのれおのれおのれ!」

壁に激突して片膝を付くギルガメツシユを追撃する様に、彼女の体がユラユラと動き始める。

「待つて貞子さん!」

「そこまでだ。貞子……さん」

干将・莫耶を構えたエミヤと藤丸が二人の間に割って入る。

「……………?」

「これ以上の戦いは此方も看過出来ない。君が何故他のサーヴァント



にそこまで関心を示すのかは解らないが……。どうしても殺り合うならシユミレーションルームに行く事を勧めるが……。どうだね？」

エミヤが彼女に問い掛ける。英雄王が貞子に絡んでいる、と言う話をクーフリーンから聞いてからずっとその事が頭から離れなかったエミヤはクーフリーンとメディアが食堂から居なくなるのを見計らって、マスターにこの事を報告しに行った。

いざ到着してみれば、まさかここまでの事態になっているとは流石に彼も藤丸も予想外だっただろう。

貞子は暫く藤丸とエミヤ、そしてギルガメツシユを見比べたあと、壁に設置されているモニターの中に姿を消した。

「待ってくれ貞子さん！まだ話は……！」

「逃げたか。いや、此方の言い分を理解してくれたのか。フィクシヨンだと思っていた存在が実際に目の前にいる状況は、何とも落ち着かんな。こんな事なら彼女の弱点を知る為に、呪いのビデオを視聴しておくんだったか？」

「エミヤ、それ絶対呪われるよ……」

「ああ、わかってるさ。冗談だ。それにしても……」

クーフリーンが『セクシーボディ』等と言うものだから変に意識してしまっただが、胸周りは……何というか騎士王と大差無かったように思える。

いやだが、数時間前に出会った貞子さんは確かにスタイルは良かったような気がしたが……これは一体どういう事なのだろうか？

「雑種、フェイカー……。貴様ら、一体何しに来おった？」

腹部を痛そうに押さえながら此方に歩いて来たギルガメツシユが二人に声を掛けてくる。

「英雄王。怪我は大丈夫なのか？」

「戯けが。この俺が怨霊如きの一撃で怯む訳がなからう。かすり傷に等しいわ」

「その割に『なにイ!?』と云う驚いた声が私には聴こえた気がしたがね」

「うん。俺も聴いた」

「フン、空耳ではないか？疲れているのならゴージャス仕様のぐつすり眠れる安眠枕を特別に貸してやろう」

「どうやら、彼は僅かながらの呪いを受けてはしまったもののダメージはそれほど受けずに済んだ様だ。しかしそれでもダメージを喰らったのは間違い無く、その事には触れられたくないらしい。だが、彼が貞子に吹っ飛ばされて壁に激突した音や衝撃音は藤丸やエミヤにもしつかり聴こえていた。故に彼は、敢えてそれを口に出すことで、話題を変えることにしたのでろう。」

「ー時に雑種よ。あの女の真名は何という？」

「え？ええと…。名前は山村貞子。英霊となれる程の逸話が有るかと問われれば微妙だけど、呪いや超能力が得意で、日本ではかなり知名度の高い有名人だね」

「あやつは幻霊同士の融合体よ。本来ならば幻霊は霊基数値の足りん虚構の存在。それを無数に存在する“あやつ自身”と強制的に融合させる事で1つの霊基となっている。あの様な存在は中々お目に掛かれんぞ」

「ええ!?!幻霊同士の融合体!?!」

「成程。時折違う気配を彼女から感じていたが、そういう事だったのか…」

「何だ雑種共。そんな事も知らなかったのか。あやつは人類を怨む怨霊。故に温情などない。優しくすれば相手は心を開いてくれる、などと言う甘い考えは捨てるがいい。良いな？我は忠告したぞ」

「皮肉めいた笑みを見せたギルガメッシュは、フンと鼻息を鳴らすと、その場から立ち去って行く。」

貞子が立っていた場所には黒い染みだけが残っていたー。

## 9話

ジャック・ザ・リッパー。

世界的に有名なシリアルキラーであり、五人の女性を殺害してスコットランドヤードの必死の捜査にもかかわらず捕まることもなく姿を消した霧夜の殺人鬼。

通称は切り裂きジャック。

藤丸立香もジャックの名前は聞いた事があった。まさかこんな幼女のような外見の人物がそうだななんて考えもしなかったが。

見た目相応に性格は幼いが、生命を奪う時には一切の容赦も迷いもない。

まさしく“ジャック・ザ・リッパー”のように。その小さな軀で、大きな人間を真つ二つにしてしまったのだから、幼い外見には似合わないギヤップがあった。

「ジャックちゃん！お願い！」

「うん！解体するね？」

足りない素材を回収する為に微小特異点を現在進行形で探索している。メンバーはジャックちゃん、騎士王、玉藻の前、ジャンヌオルタ、貞子さん。

切り込み隊長の騎士王とジャンヌオルタで前線を維持しつつ、中距離でジャックちゃんが援護。玉藻の前と貞子さんは後方で味方のサポート。

「ジャンヌ・ダルク・オルタ。前に出過ぎです。後ろに下がらなさい」「うっさいわね。アンタが全然前に出ないからこうやって私があいつらのヘイトを買ってあげてんでしょうが。感謝されても文句を言われる筋合いはないんですけど？」

ジャンヌオルタの火力は頼もしいが、攻め急ぎ過ぎている。騎士王のジャンヌが見かねて声をかけた。

「いや、ジャンヌオルタ。騎士王の言う通りだ。少し後ろに下がってくれ」

「…フン。アンタの命令に従うのは気に食わないけど、マスターの指示なら従ってあげるわ」

渋々といった様子だが、ジャンヌオルタが後ろに下がる。

ジャックが相手にしているホムンクルスは、単体ではなかなかの脅威だが、ジャックちゃんと騎士王とジャンヌオルタの三人なら難なく倒せる。

魔力も、今は問題ない。素材回収も順調に進んでいるし順調過ぎて怖いぐらいだった。

「本物の呪術を見せてあげます！氷天よ、砕け…おや？あ、あのおもしろい？貞子様、何故私の両手を拘束なさるのです？」

「……………」

「よく分かりませんが、無言の圧が怖いんですけど！助けてくださいましマスター！」

「貞子さん何やってんの!?!」

レイシフトしてから大人しかった貞子さんが漸く行動を起こしたと思いきや、何故か玉藻の前の両手を髪の毛で拘束していた。

しかも無言で。

玉藻が必死にもがくがビクともしていない。まるで万力で固定したかのように一切動かないのだ。

ジャンヌオルタや騎士王も突然の奇行に啞然とし動けないでいた。いやまあ、確かに貞子さんだけずっと棒立ちしたまま何もしてないな、なんて思っただけでもない。

「……………」

「えつとね、『呪いは私の専売特許だ』って言ってるよ」

「何で言葉もないのに分かるんですか!?!」

ジャックちゃんが貞子さんの言葉？というか意思？が分かるらしく、通訳してくれた。貞子さんが喋れないと意思疎通が困難で困っていたところなので非常にありがたい。

「んー、何となく？あの人とわたしたちは似たもの同士だから」

「似たもの同士…？それって…」

「……………」

玉藻の前の両手の拘束を解いた貞子さんは無言で戦場を見据える。そこに立つのは、弓や剣を構えたアマゾネス達。

恐らくこちら一帯を縄張りとしている部族。然し、こちらとあちらの側では実力差は明白。貞子さんも敵の力量を測るために観察しているのだろうか…？

「はあああつー！」

「燃えなさいー！」

貞子さんに気を取られていたら、ジャンヌオルタと騎士王がそれぞれ武器を振るいアマゾネス達を一方的に葬っていた。

本当に危なげなく殲滅した二人は、一息ついてこちらに向き直る。特に変わった様子もなかった。良かった…。

「ガアアアアア!!」

「キメラ？どうしてこんな場所に…」

「血の匂いに釣られてやって来たんじゃないの？どうせ燃やすんだから関係ないわよ」

こちらに目もくれず、虎が人のように雄叫びをあげている。その姿は正しくキメラだった。虎の頭と山羊の頭、尻尾が蛇の生物。その異常な姿に残ったアマゾネス達は恐れをなし一目散に逃げていく。

「ん？何よガキンチョ。そこ邪魔だから退きなさい。燃えるわよ」

「やだ。きめらの心臓美味しいんだもん」

「殺した後に勝手に食べればいいじゃない」

「燃やしたら食べられないよ？」

「ならば私がお相手致しましょう。二人とも下がっていて下さい」

「王さま、邪魔しないで。きめらはわたしたちのご飯だもん」

「むう…」

キメラと戦闘しようとする、すかさずジャックに制される。ジャンヌオルタは邪魔をされたのが気に食わないのか、顔を顰めたが、ジャックは譲らない。

騎士王も困った様子で藤丸を見る。これは、どうするべきなのか。キメラ相手にジャックちゃんが悪戦するとは思えないし、ここは任せの方がいいのだろうか？

それにしても、キメラの心臓が食べたい…か。あの巨体の心臓を食べたら、確かにはお腹は膨れそうだ。美味しいのかはまったく分からないけども。

「……………」

「呪いは必要かって？呪いなんかいらないよ。斬つちやえばそれで終わりだもん」

「キシヤアアア!!」

キメラがジャックちゃん目掛けて飛びかかる。大きな口をあけて、少女を飲み込もうとしたその瞬間を逃さすことなく、一閃する。

飛び掛かった姿勢のまま、キメラの体が上下で分かたれて地面に落ちた。

あまりにも一瞬の事だった。あまりにも呆気なく、勝負は決まった。

「…………ツ！ジャックちゃん後ろだ！」

だが、ジャックちゃんの背後にもう一体のキメラが潜んでいた。ジャックちゃんに向けて、鋭い牙が迫る。

危ない。その一言が藤丸の脳内を埋め尽くす。しかし、貞子さんが既に動いていた。

「……………」

自身の髪の毛を鋭利な刃物のように鋭く尖らせてキメラの両目を抉る。最後には脳を貫かれ、生命活動を終えたキメラが崩れ落ちる。

貞子さんが助けに入ってくれたお陰で、ジャックも難を逃れることができた。

しかし、藤丸は安堵するどころか冷や汗をだらだらと流す他なかった。何故なら、貞子さんに一切の迷いも躊躇もなかったから。

いや、敵なのだから殺すのは至極当然な事だし、そもそもキメラの一体や二体なら、彼女一人で容易に対処出来るだろう。

だが、その判断に至るまでの時間が恐ろしく早かった。あまりにも一瞬過ぎて目で追う事もできなかった。

「あんな大きいキメラを瞬殺ですか。中々やりますね。それに髪の毛をあんな変幻自在に操るとは」

「たかがキメラ如きを葬ったくらいで何を言ってるんだか。あんなのは倒せて当然です」

あの瞬間、貞子さんは敵であると認識するより先に、ただ、敵だから始末したとしか考えておらず殺すことが前提にあったのだ。

そんな彼女の様子が、少しだけ怖いと感じた。それはまるで人の死を何とも思っていないみたいで。いや、実際何とも思っていないのだろうか…。

「あなたも心臓が食べたいの？でも、これはわたしたちのだからあげないよ？」

「……………」

ジャック・ザ・リップパーの言葉に、貞子は無言でそっぽを向く。そんなゲテモノに興味はないと思っているのか、はたまた素っ気ない態度をとっているのか、それは彼女以外にわかるはずもないだろう。いや、ジャック・ザ・リップパーならば彼女と意思疎通ができるから何を考えているのかわかるのだろうか。

『モニターで貞子さんの行動をチェックしてたけど、相変わらず凄い能力だね。超能力が得意とは立香くんから聞いていたが、空間移動に加えて自分の髪の毛まで念で動かすなんて…』

「なんと、超能力ですか？それはまたとんでもない能力を持った人がカルデアにも来たものですねえ。私も自分の肉体を自由に変えたりできますが、彼女の能力はまた違いますし。同じ呪殺系サーヴァントとしては、シンパシーを感じると申しますか…」

同じ呪い系サーヴァントの玉藻ちゃんが貞子さんに親近感が湧いているようだった。いや、そんな親近感湧かせてる場合じゃないと思うんだけどね…。

しかし、確かに玉藻ちゃんの言う通り、その能力がまたとんでもないものだ。髪の毛を念で動かすという芸当もそうだが、空間と空間を繋ぐテレポーターションまで出来てしまうらしいし。

「おや、いかながなさいました貞子様？何ですかその手に持ってる怨念がたっつぷり詰め込まれた代物は!?!」

「私の直感が告げています。それは、恐らく呪具の類かと」

「如何にもヤバそうなものじゃない」

貞子さんの手に握られている物を俺は知っている。アレは間違いない。イービデオテープだ。

多くの人間を恐怖のドン底に突き落とす通称、呪いのビデオ。貞子さんの怨念で作られたそのビデオは見たものを1週間以内に死に至らしめる。

対処法はただ一つ。それはビデオをダビングして他人に見せること。そうして人から人へ呪いを広めていくことが貞子さんの真の目的であると、ホラーマニアの友人から聞いたことがある。

「……………」

『両手を拘束したお詫びの印にこれどうぞ』って言ってるよ」

「お詫びと言いつつシンプルに私を呪おうとしてませんか!？」

「貞子さん。今の時代にVHSはないから、ダビングは出来ないと思う」

「……………」

呪いを広める為なら仕方ないが、貞子さんはダビングが出来ないことにショックを受けていた。ちよつとしょんぼりしてる姿が可愛かったのは内緒である。



次の日、アラーム音で目が覚めると何故か貞子さんが天井に張り付いていた。

いや、意味わからんのだが？何で当たり前のように俺の部屋に居るの？部屋の扉のセキリユティ強化したよね？貞子さんの前じゃ防犯なんて何の意味もないの？

「アッアッアッアッアッアッアッアッ」

奇声を発しながら天井にへばりついている様は何とも異様な光景だ。そして貞子さんは天井から飛び降りると、ドスンッ！という音を響かせて俺のベッドに着地する。



「や、やあ。貞子さん。おはよう…。えっと、今日もいい天気だね!」  
「アッアッアッアッアッ」

いや、俺の部屋窓ないから外の様子なんてわかんねえよ。ヤバい。焦り過ぎて冷静沈着な筈の俺の言語中枢が崩壊している……! 貞子さんは、そのまま俺の上に跨り、ゆっくりと顔を近づけてくる。

めっちゃいい匂いするわあ……って違うわ!!何この状況! 誰か説明してええええええええ!!!!

「と——し」  
「へ?」

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ」

何か言おうとしている……? え、ちよつと待って。マジで近い。めっちゃいい匂いする(2回目)からドキドキが収まらないんですケド!?

何だ。貞子さんは何がいいたいんだ?何かを必死で俺に伝えようとしている。そしてそれは俺にとって嬉しい事なのか、それとも、恐ろしいのか……。

恐怖のあまり心臓が激しく鼓動する中、貞子さんの口元がゆっくりと動く。

「と、し、お…」

「違います、人違いです」

一体誰と勘違いしてるんだ…貞子さんは。いや待て、『としお』だった?。

まさか——

「か、伽椰、子さん…?」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

あ、やばい。これ俺死んだかも…。



「え？彼女の体格が変？」

「うん。召喚されたばかりの彼女…山村貞子の体格は全体的に細くて、身長150cm程度しかなかった。だけど、作戦室でモニターから這い出て来た彼女の体格は細身である事は同じだったが…」

真面目なトーンでロマニが告げる言葉の数々に、ダヴィンチは思わず唾を呑んだ。

「明らかに胸部に大きな変化があった。平たく言うなら胸が小さかったんだ。前見た時は明らかに大きな膨らみがあった筈なのに…」

「…君に少しでも期待した私が愚かだったよ、ロマニ。そういうセクハラ発言は慎みたまえ」

ダヴィンチは呆れ半分、軽蔑半分の冷たい視線でロマニを見る。しかし、当の彼は「いやいや、レオナルド！本当なんだって！」と、自身の発言が嘘ではないことを主張する。

「それじゃ何かい？山村貞子は一人ではなく複数体存在するとも言うのかな？」

「まだ確証は持てないけども…」



…。有り得ないだろ。だって伽椰子さんの息子の俊雄君と俺じゃ年齢差があり過ぎる。

てか、こんな大きな息子が居てたまるか。だけど、もしそれが事実だとしたら？

「……………ア、ア……………ア、ア……………」

「伽椰子さ…ん？」

徐に藤丸の首元から手を離すと、這いずる様にしてベッドからずり落ちた。藤丸が慌てて「ちよ！大丈夫!?!伽椰子さん！」と下を覗き込めば、昆虫のような四足歩行で藤丸に背を向けたまま遠ざかる伽椰子さんの姿があった。

そして、部屋の隅まで移動すると、ゴキ…ゴキと音を鳴らしながら立ち上がって猫背のままユラユラ揺れながら藤丸を見つめる。

「(え？何これ？どうしたらいいの…俺?)」

静寂に包まれる室内。ただ、伽椰子さんの奇声だけが時折響く。藤丸はただ呆然と伽椰子さんを見るしかなかった。だってこの状況でどうすればいいのかわからんし。

……………とはいえ、このまま見つめ合うだけだと相手に失礼だと思った藤丸は話しかけてみることにした。うん、コミュニケーションって大事だからね！決して沈黙に耐えられなくなった訳じゃない。

「あ、あのさ。伽椰子さん。どうして急に首を絞めるのを止めたの？何か理由があるの？」

「……………」

無言。

先程まで奇声を発していただけに、急に黙られると不安になる。と言うか、今話しているのは本当に伽椰子さんなのか？貞子さんといきなり入れ替わってるなんて事ない？

外見だけじゃ判断が難しいから困る。

「(一か八か、近付いてみるか…?)」

とりあえず、伽椰子さんにゆっくりと近づいてみる。すると、警戒しているのか一定の距離を保ちつつ後ずさりした。あ、今壁にゴンっ

てぶつかった。

藤丸は更に一步前に進む。それに反応して伽椰子さんもまた後ろにこれ以上下がれないのに下がる。

それを繰り返していたら、あつという間に伽椰子さんの元まで辿り着いた。

「いきなり怖い出来事はあったけども……。おはよう、伽椰子さん」

「…………ア、ア…………ア…………」

恐る恐る声をかけてみるが、伽椰子さんはうめき声をあげるばかり。うーん。どうするかなあ……。此処にジャックちゃんがいいたらなあ。多分、なんて言ってるのか分かるのかも知れないけど。

「色々言いたいことはあるけど、まずは朝食一緒に食べない？あ、その前に俺は先ずはシャワー浴びないとか。ちよつと待っててね。すぐ終わるから！」

藤丸はそう言うと、着替えとタオルを持って自室に備え付けてあるシャワールームへと向かった。

前回の失敗（鍵のかけ忘れ）を踏まえてシャワー室の扉に鍵をしっかりと掛け、服を脱いでシャワーを浴び始める。

シャワーから流れ出る冷たい水で髪を濡らしながら『これからどうするべきか』を考える。伽椰子さんの事はダヴィンチちゃんやドクター、他のサーヴァントの皆に説明しないといけないが、貞子さんについてまだ皆の理解があまり進んでいない上で更に伽椰子さんの登場。迂闊な発言して更に状況悪化とかしたら困るし……。

……とりあえずは様子を見るとして、後で相談してみよ。ダヴィンチちゃんとかドクターに事情説明して協力してもらうしかない。シャンプーを手に付けて泡立て始める藤丸。そのまま髪を洗っていると、外でドタバタと物音が聞こえた。

「……何この物音？伽椰子さん？」



藤丸がシャワールームに消えてから数分。室内では重苦しい静寂が流れる。そんな中で、伽椰子はただ静かにベッドに座りながら藤丸のいるシャワールームを見つめていた。前髪から時折覗かせるその瞳からは、感情は一切感じ取れない。

そんな時、不意に自室の扉が突然開いた――

「ま、す、たあ♡貴方の清姫が朝の♡挨拶に来ましたわ♡」

お馴染みの変質者じみた挨拶で藤丸の部屋に入って来た清姫。キャスター達の努力の結晶である嚴重なセーフティを一体どうやって解除したのか？

「あら？貴女様は…」

「アッアッアッアッ」

だが、彼女が部屋を訪れるのはあまりにもタイミングが悪過ぎた。ベットにちよこんと座る伽椰子の姿を目視した瞬間、清姫の目がすつと細くなる。

「山村貞子さま、ですわね？玉藻さんやますたあから話は聞き及んでおります。――それで、何故ますたあの部屋に居るんです？」

普段の甘い蕩ける様な声は何処へやら。低く、まるで威圧するかの様に語りかける彼女の表情は恐ろしく冷たかったのは言うまでもない。

然し、どうやら清姫は目の前で座っている人物を山村貞子と勘違いしている様だ。

「アッアッアッアッ」

「呻き声だけ発せとは言っておりません。ますたあに何をされたのですか？事と次第によつては――」

伽椰子の返事など期待していないとばかりに、清姫は冷たい声音で続ける。そして、彼女は袖口から扇子を取り出すと、それで口元を隠しながら続ける。

――次はありませんわよ？

その言葉と同時に、清姫から放たれた凄まじい殺気が伽椰子を容赦なく襲う。

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ」

殺気をまともに受けても尚、呻き声を上げるだけの伽椰子。清姫はそんな様子に更に苛立ちを募らせ、鋭い目付きで睨む。

そんな清姫を更に煽る様に、清姫の頭上の壁に飾っていた絵が突如落下する。

「きゃー何ですか急に!?!」

ドゴオン!という音が室内に響くと同時に、壁に飾られていた額縁の幾つかに亀裂が走り、ボトボトと床に落ちていく。

「……最初の一二つ目。わざと私の足元に落としましたよね?もう許せませんわ。ここでお灸を据えて!……ってそんなの駄目です!此処はますたあの自室。その様な場所を血で汚すなど、そんな事が許されていいはずがありません!」

だが、怒りで我を忘れそうになった清姫の脳裏に、笑顔で自分に向かって手を振る藤丸の姿が思い浮かぶ。

「はあ…、ますたあ♡……は?!ゴホン!貞子さま。此度は目を瞑りますが、もしますたあの部屋にまた無断で侵入した時は、覚悟してくださいませね」

「アッアッアッアッアッアッ」

「伽椰子さーん!一体何があつたんだ…って清姫え!?!何で此処にいるの!?!」

シャワールームから出て来た藤丸の目に飛び込んできたのは、先程同様に伽椰子に向けて殺気を放つ清姫と、シャワールームから出て来た藤丸を見つめる伽椰子という理解不能な状況。しかも、壁に飾つてある絵の何枚かに亀裂が入って床に転がっていた事に更に混乱する。「ますたあ!お怪我はございませんか?何か身体に違和感などはありませんか?」

「?至って健康そのものだよ?…それより、どうやって部屋に入つて来たの?扉は嚴重にロックされてる筈だけど」

「愛の力に不可能はございませんわ♡」

「何の説明にもなっていないよ!」

状況についていけない藤丸は、取り合えず清姫に説明するよう求めるが、彼女は伽椰子に向けて殺気を放ちつつ恍惚の表情を浮かべていた。……説明してくれそうにないなコレ。

それにしても、さつきから気になってたけど、何で清姫はあんなに伽椰子さんを敵視してるんだ?理由を尋ねても「乙女の秘密です♡」とはぐらかされては、そのまま藤丸に抱きついてくる。

「所ですすたあ。先程から仰ている伽椰子さんとは?」

「説明するのは難しいんだけど、伽椰子さんっていう、貞子さんと同じ日本のホラー映画を代表する怨霊がどうやら貞子さんと合体してるみたいなんだ」

「まあ…そうなのですか?然し、合体したと云ってもそこまで危険な人物には…」

「いや、甘いよ清姫。この二人がタッグマッチ組んだということは、最早邪神レベル同士の戦いを予感させる」

「そんなにですのっ!」

貞子&伽椰子の二人の最凶がカルデアに存在しているという事実。人理は何故よりによって最凶最悪の怨霊達に助けを求めたのか。

その気になれば人類滅亡なんて軽くやってしまいそうな貞子さんと伽椰子さん。この二人がカルデアで共同生活を送っていくとか何その笑えない状況は。

「そういうえば、清姫は俺に用事でもあったの?これから食堂で朝食を食べるからストーキングならまた後にしてもらえと…」

「ストーキング自体は否定なさらないんですね。もしや、私のますたあを想う気持ちで遂に通じました!?! はあ…ますたあったら。照れてしまいますわ♡」

違います。

云つても通じないから諦めているだけです。

なんて心中で思っている事が清姫バレたら転身火生三昧されそうだから黙っておく藤丸。

「伽椰子さんもそれで…ってあれ?」



「アッアッアッアッ」

此方に背を向けてフラフラと歩き去っていく彼女を藤丸は呼び止めようとするが、彼女から発せられた奇声を聞き届けて、伸ばした手を戻した。彼女が歩みを進める先——そこには黒く淀んだ見覚えのある古井戸があった。

どうしてまたあの古井戸がある…？確か、婦長が「これは汚染の塊です！殺菌ツ！」って両手にアルコールスプレーをかけて消毒していた筈だけど……。

「清姫。先に食堂に行つて待つてくれ。俺は伽椰子さんと話をしていくからさ」

「え？で、ですが、ますたあを危険に晒すなど私には…。」

「大丈夫！後で必ず合流するから！」

「そんな露骨な死亡フラグを建てないで下さいまし!?!…：…：分かりました。他ならぬますたあのお願いですものね。でも、無理は絶対になさらずに！ 約束ですよますたあ？もし破られたのなら、その時は…：…：ふふ」

藤丸はそんな脅迫紛いの言葉に苦笑いしながら、立ち去っていく彼女を見届けるのだった。

「アッアッ…アッ」

「伽椰子さん待つて。俺の話を聞いて欲しいんだ。ひよつとしてき——」

俺を気遣つてくれたの…？

「いや、俺の勘違いなら謝るんだけど…。清姫は明らかに伽椰子さんを敵視していた。お互い明らかに一触即発つて空気感だったし。伽椰子さんが清姫に飛び掛るじゃないか？つてハラハラしてたけど、伽椰子さんは大して反応を見せなかった——」

「アッアッアッアッ」

「今だつてそうだ。こんなに隙だらけなのに何で俺を殺さないの？

さつき首を絞めて俺を殺そうとした伽椰子さんが、この絶好の機会を逃すとは思えない。俺は伽椰子さんの本心が知りたい…」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

奇声が更に大きくなる。明らかに伽椰子さんは激昂している。

彼女は俺を殺すことに躊躇いなんてない。何時でも彼女の気分次第で俺を殺せる。先程のベッドでの出来事がそうだ。でも…でも、俺は伽椰子さんを危険だとは思えずにいた。

『と——しお』

息子の名を呼ぶその声は、とても優しく慈愛に溢れたものだった。それだけの出来事だけで簡単に伽椰子さんを信用しようとしてるなんて自分でも馬鹿だと思っている。

でも、俺は…。

「あゝあゝあゝ」

「……ッ」

古井戸まで後少しという所で、伽椰子さんがゆっくりと此方に振り返った。垂れ下がった前髪からは表情を読み取ることはできない。

——恐れるな。

——怖がるな。

——怯むな。

そのまま伽椰子さんは暫く俺をじっと見つめる。覚悟なんてこの戦いが始まった時から疾うに決まってる。

なのに、今になって怖気ている自分がいる。

思わず後退りしそうになる足にグツと力を入れて彼女を真っ直ぐ見つめる。

「あゝあゝあゝ」

伽椰子さんが全速力で俺の方へと駆け出すと俺に抱き着いて俺を押し倒した。

青春ラブコメの様な甘酸っぱいロマンスを思い起こさせるが、そんな甘いものじゃないのは、すぐ近くから響いてくる低く唸る様な声が物語っている。

俺は押し倒されたまま彼女を見上げる形で彼女と見つめ合う。彼女の美しい顔が間近にあり、そしてなぜか伽椰子さんは左手を伸ばし俺の首に手をあてた。

また首を絞められる、と一瞬思ったが、伽椰子さんはその手で俺の首を絞めようとはしなかった。

「あ、あ、あ、あ」

「うっ!?!…ぐうう…!か、伽椰子さん…」

伽椰子さんの細くて綺麗な左手が俺の首を力一杯に掴み、俺を井戸の方へと引き摺っていく。



「い…つてて…。ん、んこは…?」

ひんやりと冷える地面に違和感を覚えて目を覚ます。ふらつく両足に力を込め何とか立ち上がる。辺りは深い霧に包まれているせいで、視界がかなり悪い。

目を凝らして周囲を見渡せば目に付くのは木、木、木…。そして俺のすぐ目の前には伽椰子さんに引き摺り込まれた古井戸が…。どうやら此処は森林の中らしい。

木々の枝葉が擦れる音に風で木が揺れる音。静寂だった筈の森の中は、虫達の鳴き声と木の葉の音で騒々しくらしいに響いていた。

先程から薄ら寒い風が時折吹いており、思わず身震いしてしまう。季節はまだ夏だというのにこの寒さは異常だ。

「確か、伽椰子さんに井戸の中に引き摺り込まれて…そうだ、伽椰子さんは?一緒に落ちた筈だけど…此処には居ないのかな…?」

「…こんな廃れた井戸が有るだけの場所に俺以外の人が来るなんて珍しいな。あんたも俺と同じで呪いのビデオと貞子について調べてるのか?」

全身黒一色のダンディなおじさんに突然話し掛けられる藤丸。

「え？あ、いや、えつと…。そういう訳じゃなくて…ん？呪いのビデオ…？」

「ああ。こんな人気のない場所に来るんだ。当然だろ？俺は高山竜司。あんたは？見た所、かなり若いように見えるが…」

高山、竜司？その名前、何処かで聞いた覚えがある気がする。何処だったっけ…？ああ、そうだ。ーリングだ。原作だと哲学講師、映画だと数学講師と設定が若干異なる人。

だが、そんな彼がどうして此処に…？

「藤丸立香と言います。訳あって此処に引き摺り込まれたんです」

「引き摺り込まれた、か…。それは災難だったな。此処は貞子が作り出した異空間だ。奴のテリトリー内では自力で抜け出す事は不可能だぞ」

「やっぱり此処って貞子さんが亡くなった井戸のある場所なんですね…」

「貞子さん？藤丸君は奴の関係者か親族なのか？」

好奇心半分。疑い半分といった感じの視線を向ける高山。その鋭い視線に一瞬ドキツとしたが、ここで変に嘘を吐けばより疑惑を深めるだろう。藤丸は正直に高山に告げることにした。

「俺は貞子さんのマスターなんです。あ、マスターと言うのは…」

「ああ、知っているよ。サーヴァントとかいう使い魔の主だろ？」

「知ってたんですか!」

「名前だけだがな。現代の科学ではどうやっても実現不可能なものーそれが魔法。そしてそれを扱うのは魔術師…。なあ、教えてくれよ。魔術師が追い求める『根源』ってのは何なんだ？」

「それは…すいません。俺もよく知らないんです。魔術師としての基礎知識も無いはずの素人なので…」

「そう、か」

まさかの返答に落胆する高山。そのまま俯き黙り込んでしまうが暫くすると顔を上げた。

「藤丸君、一つ忠告しておく。貞子は危険過ぎる。死にたくなければ

契約は即刻破棄した方がいい。何もかもが手遅れになる前にな」  
「契約を破棄って…そんな！貞子さんは大切な仲間なんですよ!？」  
「…大切な仲間か。君自身はそう思っているけど、当人はそうとも限らない。マスターとやらにはサーヴァントに命令できる『絶対命令権』があるんだろ？それで貞子を抹殺する事はできないのか？」

「抹、殺…:…?」

「君も貞子のマスターなら奴の危険性を理解してる筈だ。あいつは怨霊なんて生易しい存在じゃない。何れ、君や君の周りにいる大切な仲間にも牙を向く事になるぞ」

そんな簡単に彼女の存在を否定する事なんて俺には…。

けれど、反論はできなかった。思い当たる節が有る為に高山の言葉が胸に突き刺さってしまう。

少なくともカルデアに来てからの彼女はサーヴァント達と何かしらの一悶着はあれど、悪事をするような事もなかったし、俺の指示にもちゃんと従ってくれる。

けれど、貞子さんの危険性を考えれば仕方無いと言わざるを得ないのかもしれない。

そもその彼女は人類に深い恨みを持つ怨霊なのだから…。

「……………」

突如、藤丸達のいる空間に耳障りな騒音が広がり、霧の濃度がより増した。白い景色が視界を阻み、音の正体を見定める事ができない。音が次第に大きくなっていくと同時に白い霧の中から左右にゆらゆら揺れる人影が此方に向かってくるのが分かった。

ーー来る。

藤丸はそう確信した。

視界を妨げる霧が晴れると、そこには貞子が佇んでいた。

「……………」

「山村貞子。お前に会うのはこれで2度目だな」

「貞子さん……」

「失礼します！ドクター！」

医療室のドアが勢いよく開かれ、ロマニは驚愕する。息を荒くしながらそこに立っていたのはマシユだった。

余程慌てていたのか額には汗をかき、前髪が少し張り付いている。マシユのただならぬその様子から何か良くない出来事が起こった事が容易に想像できた。

「マシユ？一体どうしたんだい？かなり焦った様子だけど……」

「先輩の……先輩の行方がわからないんです！カルデア中を隅々まで見渡したんですけど何処にも居ません！」

## 11話

藤丸立香が行方不明。

マシユの報告を聞き、ドクターは表情を引き締める。藤丸に何が起きたのか分からない以上、最悪の事態を考えなければならぬ。

「落ち着いてマシユ。先ず藤丸君には緊急用の通信機を持たせている筈だから、その反応をモニターで確認して、何か異常事態が起きてるかどうかを見極めよう」

ドクターの言葉に落ち着きを取り戻すマシユ。最悪の事態を想定して、予め藤丸君には緊急用の通信機を常を持たせている。もし仮に藤丸君に万が一の事が起こっても直ぐに反応を示す筈だ。

「反応は…藤丸君の自室？」

「え？そんな筈はありません！一番最初に先輩の部屋を訪れましたが、先輩の姿はありませんでしたよ!?!」

マシユの言う事が真実だとすれば、それは即ち緊急事態だということだ。緊急用の通信すら出来ないような状況下にあるということ。

一体どうしてそんな事が起こったのか？まさか、何者かが通信機器に細工をしたとでもいうのだろうか？しかし、そんな事をすれば直ぐにバレる筈だし、そんなメリツトは無いだろー。

「落ち着きたまえマシユ。こういう時に君が落ち着かなくてどうするんだい？」

「ダ・ヴィンチさん…」

管制室にはダ・ヴィンチちゃんもやって来ていた。彼女の表情は硬く、いつもの陽気な態度は何処にもない。

そして彼女はマシユの肩にポンつと手を乗せたかと思えば、優しく諭すように話し出す。

「ーそれはまるで姉が妹に接する時のような慈愛に満ち溢れたものだった。」

「最後に立香君を目撃したという人物は？」

「私ですわ」

「清姫さん…?」

二人の会話に入り込むようにして突然現れた清姫。マシユとドクターが疑問の表情を浮かべる。そんな二人の表情など気にする素振りもなく、彼女は語り続ける。

「ますたあに朝の御挨拶をと思ひまして、自室に侵入：ゴホン！お邪魔させていただいたんです。然し、ますたあの自室には既に来客がいらっしゃいました」

「来客だつて？それは一体誰なんだい？」

「貞子さん…いえ、ますたあが仰っていたのは“伽椰子さん”なる貞子さんによく似た人物ですわ」

「伽椰子さん？そんなサーヴァントはカルデアには居ない筈だけども…」

カルデアには英霊としてサーヴァントはたくさん存在している。しかし、そんな人物には心当たりがない。

勿論、日本出身の英霊は多く存在する訳で間違いという可能性もあるが、『伽椰子』なんて名前の日本人には心当たりがなかった。

「禍々しい雰囲気を漂わせた危険な方でしたわ。ますたあは『彼女と話してから食堂に行くから先に行つて待つてくれ』と私に仰いました。なので、私はますたあの言付け通りに食堂でお待ちしておりますのですが…」

「立香君は何時まで経つても来ることはなかった、と」

ダ・ヴィンチちゃんの間い掛けにコクリと頷く清姫。

どうやら彼女が最後に藤丸を見た人物のようだ。しかし、食堂でずっと待つていたにも関わらず、彼は来る事はなかったという。

マシユはそんな清姫の話聞いて何か引つ掛かるところがあったのか考え込むように俯いていた。そして暫くしてから顔を上げると真剣な眼差しをドクターに向ける。

「清姫さんの仰っていたその伽椰子さんが”貞子さんによく似た人物”なら、先ずは貞子さんに詳しい事情を聞く事が先決だと思います。何か分かるかもしれませんし…」

マシユの意見にドクターも同意するように頷く。確かに今の段階



では情報が足りない。その伽椰子さんなる人物が貞子さんの関係者であるならば、きっと貞子さんが何か事情を知っている筈だ。

先ずはその人物と接触するべきだろう。

しかし、そんな彼らの考えを嘲笑うかのように事態は更に悪化していく事になるのだった。



「まさか肝心の貞子さんの姿が何処にも見えないなんて、ね。彼女がこの事件に深く関係している事は間違いないんだろうが、一体何処に居るのか…」

よくカルデア内の施設に幾つか設置されたモニターを介してモニターから這い出て来ていたが、今はその姿がない。

まるで煙のように消えてしまったかのようだった。カルデア中を探しても彼女の姿は何処にもない。既に10分以上が経過しているというのに未だにその行方は掴めていないのだ。

ダ・ヴィンチちゃんは険しい表情を浮かべながら考え込んでいるようだった

「ふと思っただんだが、エミヤ君なら何か知っているんじゃないかな?」「エミヤ先輩…ですか?」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に首を傾げるマシユ。

「貞子さんを見た時のあの反応からして、もしかしたら彼なら」伽椰子さんについて”何か知っているんじゃないか”と思ってね」

「成程。確かにそれは良い提案だと思います」

ダ・ヴィンチちゃんの提案にマシユも同意する。山村貞子がカルデアに現れた時、最初に強く反応を示したのは藤丸君を除けば、他ならぬエミヤだった。ならば彼が何か知っている可能性は高い筈だ。

「そういえば清姫はどうしたんだい?姿が見えないようだけど…」

「清姫さんなら先輩の自室に用が有ると仰ってました。あの、呼び戻した方が良いでしょうか?」

「いや、その必要はないよ。彼女にもきつと

考えがあるのだろう。今はそつとしておいた方がいい」

ダ・ヴィンチちゃんは清姫の行動に疑問を抱きながらも、その事について深く追及する事はしなかった。彼女は彼女なりに何か考えている事があるのかもしれないと納得し、それ以上は何も言わなかった。

ダ・ヴィンチは通信機を取り出すとエミヤに連絡を取ることにしたのであった。



「伽椰子さんだつて？バカな…。まさか彼女までサーヴァント化したと云うのか!？」

エミヤの反応はダ・ヴィンチちゃんの予想を遥かに上回るものだった。

目を見開き、驚愕の表情を浮かべている事からも彼の驚きの大きさが窺える。つまりは、それだけ危険な人物である事に他ならない。

「その反応を見るに、かなり危険な人物なのは間違いなさそうだ。…貞子さんによく似た伽椰子さんとは一体何者なんだい？」

「貞子さんによく似た…？俺の知っている伽椰子さんとは姿が違うのか…？つと、何者かだったな。『呪怨』という作品に登場する貞子さんと同じ、日本のホラーを代表する有名な怨霊だ。その死に様はあまりにも惨たらしいものでね。だが、同時に、彼女には同情する部分もある。私も過去に呪怨を拝見したことはあるが、あまり思い出したくない記憶だよ」

彼がこんな怖がるとは…、余程怖いホラー作品らしい。ダ・ヴィンチちゃんはエミヤにそのホラー作品について詳しく尋ねることにした。

『呪怨』

粗暴な夫によってその命を喪った女性、佐伯伽椰子の怨念が宿る一軒の家を中心にして描かれるオムニバス形式で、呪いの家に関わった全ての人間が伽椰子の怨念によって呪い殺されていく。

仏壇の中や布団の中に伽椰子が現れるなど、過激な恐怖描写と、少しでも関わった人間は全て無残な末路を迎えるという理不尽な恐怖で強烈なインパクトを残した作品。

呪怨とは強い怨念を抱いて死んだモノの呪い。それは死んだモノが生前に接していた場所に蓄積され、「業」となる。

その呪いに触れたモノは命を失い、新たな呪いが生まれる。

「…平たく説明すると、そんな怨霊だ」

「成程ね…」

「そ、そんな恐ろしい作品なのですか!?!」

エミヤの説明を聞き終えたダ・ヴィンチちゃんは額に汗を浮かべながらゴクリと唾を飲み込み、マシユは恐怖で顔が真っ青だった。

まさかそんな有名なホラー代表する怨霊達がサーヴァントとして召喚されるなんて、一体誰が想像できるだろうか？

いや、そもそも英霊として召喚されること自体が本来あり得ない事だ。しかし現実には彼女はこうして存在しているし、カルデアにやって来たのは紛れもない事実だ。ならば受け入れるしかない。

「フィクシオンだと思い込んでいた存在が現実には現れるとは。これは中々に恐ろしい話だ」

「それは私も同意見だ。然し、此処には神も王も居るんだ。今更何が召喚されても別段驚く事でもないだろう?」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に苦笑いを浮かべるエミヤ。確かに彼女の言う通りだ。此処には神も王も居るのだ。今更怨霊が1体2体増えたところで驚く事でもないだろう。

「貞子さんや伽椰子さんには弱点は存在しないのかい?」

「弱点は分からないが、対処法なら知っている。貞子さんは”目を見ない、関わらないこと”。伽椰子さんは”呪いの家に侵入しない、関わらないこと”だ」

関わらないって、もう既にカルデアにやって来ている以上は無理な

話なのでは？という心の中のツツコミは置いておいて、エミヤの言う対処法が通じるのかは謎だったが、取り敢えず対処法については理解したダ・ヴィンチちゃんだった。

然し、その”対処法はハナから間違いである”と、ダ・ヴィンチが気付くことになるのはもう少し先であった。



「……………」

「覚えてるか？お前に殺された高山竜司だ。って、そんなの一刻覚えたる訳ないよな。貞子、お前は自分の呪いを人類に発信して何がしたいんだ？復讐のつもりか？」

「……………」

沈黙を続ける貞子に対して、竜司は一方的に話し続ける。その表情は真剣そのもので、真剣に貞子に問い掛けていた。貞子の目的、彼女が人類に何をしようとしているのかを。

竜司は答えが返ってくる事を期待していた訳ではなかった。だが、それでも聞かずにはいられなかったのだ。

貞子は何故人間を殺めるのか？復讐のつもりだったのだろうか？ならばせめてその理由だけでも知りたいと思っただろう。そんな竜司の質問に貞子は沈黙を貫くだけだった。

「貞子さん。此処から出る方法知ってる？実は伽椰子さんに井戸に引き摺り込まれちゃって…」

「藤丸君。さつきも言ったが此処は貞子のテリトリーだ。脱出は…いや待て、伽椰子？誰なんだそれは？」

貞子の背後からひよつこりと姿を見せて質問をする藤丸。いきなり知らない名前を告げられた高山は混乱した様子だった。

藤丸が「貞子さんと同等の力を持つ怨霊で関わると何処までも追っかけて来る」と簡潔に説明すると、高山は目に見えて動揺する。

「あの貞子と同等の力だって!?!そんな莫迦な…、そんなのどうやって対処しろって云うんだ！」

高山は頭を抱えながら絶叫する。そんな高山を励まそうとする藤丸だったが、やはり貞子の圧に押されているようで、苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

藤丸がチラリと貞子の方に視線を向けると、長い黒髪が生き物の如くうねうねと動いていた。

「(ヤバイ!)」

貞子の髪の毛が鎌首をもたげるように持ち上がった瞬間、本能的に拙いと感じた藤丸は令呪に意識を集中させる。

——貞子さんが高山さんを殺そうとしている。

自分の目の前で人が死ぬ事は藤丸には耐え難いものだった。自分が頼りないばかりに一体何人の人の命が奪われた？

もう後悔なんて絶対したくない。意地を見せる藤丸立香。お前がやらなきや誰がやる？

藤丸の令呪が光り輝き、同時に貞子の髪の毛が一気に竜司に襲い掛かる。

然し、藤丸は大きな勘違いをしていた。狙っていたのは高山の方ではない。

「令呪を持って命ず…モガア!!…!!…!!」

「……………」

狙っていたのは最初から藤丸の方だったのだ。正確には令呪で邪魔されると困るので口を封じたと言うべきか。

「藤丸君大丈夫か?! くっ、これは本当に髪の毛なのか! なんて強力な力で引き剥がし難いんだっ……………」

竜司は慌てて藤丸を抱き抱えると、彼の口を覆っていた貞子の髪の毛を引き?がすべく力を加える。だが、貞子の髪の毛は全く離れる様子を見せない。まるで強力な粘着シートにくっついてしまったようだった。

必死に髪の毛から藤丸を助けようとする竜司だったが、その行動は全て無駄に終わる。何故なら一般人の彼がどれだけ奮闘したところで、相手は超能力を使える怨霊。助ける手段は最初から用意されていないのだから。

「ぐあ!？」

貞子が首を横に動かすと、高山の体がそれに同調するかのように横に吹き飛んだ。

「あ……あああー!」

必死に手足を動かして逃げようとするが、体が恐怖で動けない。

「……………」

”自分はまた貞子に殺される”

彼はそんな恐怖に呑み込まれていたのだ。だが彼の恐怖は終わらない。

何故なら貞子の視線は完全に藤丸を見据えていたのだから。

まるで高山竜司の事は視界に入っていないかのように、彼女は視線を藤丸のみに向けるとそのまま髪の毛でゆつくりと彼の両手と両足を拘束して行く。

「……………!」

藤丸がモゴモゴと口を動かすが、口元に髪の毛が巻き付いている為の意味がなかった。

——ああ駄目だコレはもう。

高山がそう思った時だった。突然貞子の周囲が燃え始めた。

「……………?」

「貞子さん。わたくし、仰いましたよね? ますたあに何かあれば次はありませんと。それなのに貴女様は一体何をしていますの?」

両目のハイライトを消して貞子を見据える清姫。彼女の背後に立つ炎によって周囲の闇が焼かれ、辺り一面に明かりが広がるも清姫の雰囲気は恐ろしいまでに冷徹だった。どうやら彼女は藤丸が貞子に連れ去られた事に怒り心頭のご様子だ。

「ますたあ!?! 無事ですか?」

「……………ゲホッ!ゴホッゴホッ!き、清姫…? 一体どうやってここまで来たの…?」

「ますたあの部屋に如何にも怪しげな古井戸がありましたでしょう?」

そこに飛び込んだんですよ」

「飛び込んだって、結構な高さだったと思うけど!？」

「そんなのますたあを想う心があれば怖くなどありませんわ♡」

貞子の周辺が業火に包まれている影響で、藤丸を拘束していた髪の毛が燃えて地面に落ちる。

「どの様な理由でますたあを連れ去ったのかは知りませんが、ますたあの身柄は此方で責任を持って預からせていただきますわ。宜しいですよね?」

「……………」

正確には連れ去ったのは貞子ではなく伽椰子なのだが、清姫にとっては『最愛の人が他人に奪われた事実』が重要なのであって誰が連れ去ったかなんてどうでもいい事らしい。

「き、清姫だって? 確か安珍という修行僧に一目惚れした清姫が安珍に夜這いをかけ、妻として連れて帰るように安珍に懇願するも拒絶されて、最終的には怒りのあまりに火を吹く蛇身となった清姫が道成寺の梵鐘に隠れた安珍を鐘ごと焼き殺し、自分も川へ入水した話で有名な清姫伝説の清姫か!？」

「あら、随分とお詳しいのですね。ええ、その清姫ちゃんであってますわ♪」

早口で語りながら信じられないとばかりに清姫を見つめる高山に對して、清姫は彼に向けてにこりと微笑む。然し、その目は一切笑っていないかった。

「ますたあ、此処はわたくしにお任せ下さいまし。こう見えて幽霊退治は得意ですので」

「……………」

清姫の背後にある火は勢いを増し、まるで彼女の怒りの炎を表しているかのようだ。

「これがサーヴァントの力…。俺は夢を見ているのか? こんな…」

目の前の光景は本当に現実なのか? 高山はそう錯覚せざるを得なかった。しかし現実だ。貞子から発せられる圧は清姫の登場に怯んでなどいないのだから。いや、むしろ逆に強まっているかもしれない

い。

「ゲホッ！ゲホッゴホ！」

「大丈夫!?清姫!？」

「も、問題ありませんわ。ますたあ……」

突然苦しそうに咳き込む清姫。藤丸の心配した顔が目映る。

「(先程からどうも息苦しい……。何かが変わります。まるで魔力を徐々に奪われているような感覚。これもこの空間に居る影響なんでしょうか?…早めに何とかしませんと……)」

そして火が消えた瞬間、今度は清姫の周囲の景色が炎に包まれた。彼女の炎を操る能力が更に高まり、周囲を熱で包み込む程の熱量を発生させたのだ。それは最早小さな核爆発に匹敵するレベルのものであったと言えるだろう。

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ」



## 12話

「あゝあゝあゝあゝ」

「……………」

伽椰子さんの狙いは貞子のみには絞られているのか、清姫には目もくれず貞子の方へと駆けて行く。貞子も応戦する為に髪の毛を伸ばすが、伽椰子さんは長い髪をまるで蛇のように自由自在に操り、貞子の髪の毛を切り裂いて行く。

「あの貞子相手に1歩も引かない所か隙あらば殺す気では…。恐ろしい以外の言葉が見つからない」

高山が伽椰子に対して警戒心を強めた瞬間、伽椰子さんは貞子の髪を掴んで思いつきり地面に叩きつけた。

「ードゴンツ！という音が周囲に響き渡り、

それと同時に地面が凹む。

「ますたあ。二人が殺し合ってる内に此処から離れましょう」

「でも、二人を放っておくなんて俺には「下手に止めに入った方が危険です」

清姫の正論に何も言い返せない藤丸。確かに自分が行った所で何が出来るかなんてたかが知れているだろう。だが、マスターとしてこのまま指をくわえて傍観してるだけなんてしたくなかったのだ。

彼女達の生い立ちを知ってしまった以上、見捨てる事など出来ないから……。



「一先ず距離を取って逃げて来たけど、これからどうしよう……」

「ますたあ。外部と連絡は取れませんか？」

ジャミングか何かの影響だろうか？それとも霊的な何かに妨害を

受けてしまったのか？ 何にせよ外部に連絡が出来ない以上は自分達だけで何とかして貞子さんを止めるしかないのだ。

「それがどういう訳かカルデアとの通信が出来ないんだよね…。それに、清姫程ではないけど、俺もさつきから肩に重石が乗っかってるみたいに体全体が重く感じる。説明すると難しいんだけど、何となく魔力を奪われていってるような…」

「この空間そのものが“あの方の宝具”という可能性が高いですね。ゲホッ！ゴホッゴホッ！先程からわたくしやますたあの気分が優れないのもその影響かと…」

「貞子さんの宝具…。つまり固有結界みたいな物って事か」

ゲホゲホと咳き込んで苦しむ清姫の背中を撫でるように摩る藤丸。確かに彼女の言う通りだ。此処はまるで現実から剥離したような異常な空間なのだから。だが、それは言い換えれば“外部からの介入を断っている”という事でもある。

だとすれば、何故清姫はこの空間に侵入できた？—いや、考えるのは後だ。兎に角、今の自分達の目標はこの空間からの脱出である。その為には先ず貞子さんと伽椰子さんの目的を知らなくてはならないだろう。

「藤丸君、伽椰子って女の件に関して何だが…」

「高山さん？どうかしましたか？」

「奴は貞子の親戚か何かなのか？あんな貞子と“瓜二つの顔”をしてる女なんて初めて見たぞ」

「親戚じゃありません。信じてもらえるか解りませんが、あの貞子さんはさつきの伽椰子さんは一つに融合した存在なんです。だから見た目は貞子さんと完全に瓜二つで……」

高山の問いに静かに答える藤丸。

「まさか、怨霊と怨霊の融合だとも云うのか？そんな…そんなの巫山戯てるにも程がある。だってそうだろう？人類を滅ぼしかねない存在を融合させて、現代に放つなど…赦されていい筈がない！」

高山は激昂し、怒りを顕にした。確かに彼の怒りも無理はないかもしれない…。人類の歴史が滅ぶかもしれないという瀬戸際である現

状だ。だが、それを防ぐ為にこうして俺達は必死に戦っている。

そもその話、貞子さんと伽椰子さんはどうして融合したのか？リングと呪怨じゃ全く作品が異なる筈だ。それとも別の作品か何かで二人が融合するなんて設定のものが過去にあったのだろうか？

あつたとすればそれは何というか、かなり挑戦的な発想だと思う。

例えるなら世界的怪獣王と人類の救世主である光の巨人を戦わせるような夢のドリームマッチ。

眼には眼を。

歯には歯を。

ホラーにはホラーを。

呪いには呪いを。

貞子さんを抑えるための抑止力として伽椰子さんが呼ばれたなんて話だったり…は流石にないか。だとすれば二人が融合してる意味に説明がつかない。

「藤丸君、此処は身を隠すには場所が悪い。もう少し奥の方に行かないか？」

「それもそうですね。ここら辺は障害物とかありませんからよく目立ちそうですし、移動しま「ますたあ後ろです！」なっ!？」

「……………」

「あ、ああ!?!さ、貞子っ!」

「これはアサシンクラスの気配遮断?いえ、これが玉藻さんの仰っていた瞬間移動、ですわね。なんて厄介な能力ですこと」

「奇声を発さないって事は伽椰子さんじゃなくて貞子さんなのか?いやでも、それだけじゃ判断材料には…」

突如現れた貞子の姿を見た高山の顔が一気に青ざめ、清姫はそんな高山を見て冷静に分析する。貞子はゆっくりとした足取りで此方へと歩みを進めて来る。まるで獲物を追い詰める蛇のように…………。

清姫はぐっと扇子を固く握る。貞子が作り上げたこの空間は呪いそのもの。英霊やマスターの魔力を吸い上げ己が力とする。つまり、この空間内では英霊やマスターは弱体化してしまうのだ。

それも事態を放置すればする程、戦況は悪化の一途を辿る。

(一刻も早く此処から脱出しなければ拙いですね…。)

清姫は覚悟を決め、貞子に向けて構えを取るが……。

「ぐうっ!? あああ! な、な… んで…。 目… み… てな——」

突然、背後から高山の苦しげな声が聞こえてきた。慌てて後ろを振り返った清姫が見たのは地面に倒れ苦しむ高山と、高山に駆け寄る藤丸の姿だった。

高山は何とか起き上がろうとするも体に力が入らないのか、その場で藻掻くことしか出来ない様子だ。

藤丸が必死に高山に呼び掛けるが、やがて両目と口を大きく開けたまま白目を剥き、ピクピクツツと痙攣しだす。そしてそのまま動かなくなってしまう。

「貞子さん! 何で高山さんを!!」

「まずたあ落ち着いて下さい! 先ずは距離を——」

——貴方達を助けに来た——

「え?」

藤丸の頭の中に響く、か細い女性の声。いや、声というよりも意識に直接語りかけてきた、というべきだろうか。誰の声だ? 誰が俺に話し掛けて来ている? …いや、そう考えるのは野暮なのかも知れない。目の前で片手を振って「私だよ」と言わんばかりに全力で俺にアピールして来てる貞子さんを見て、察しが悪いほど俺も鈍感じゃない。

——ぼけ——ってしてる時間はない。あいつらが来る。早く付いて来て——

あいつら?

「いきなり付いて来いって言われても! そもそもどうして高山さんを…」

「…まずたあ? 先程から一体何を仰ってるんですか?」

——高山は別の私が作り出した幻。言い換えると、替えのきくあやつり人形。ほつといたら貴方達が危なかった——

高山さんがあやつり人形だって? そんな莫迦な…。 そんな悪い人には全く見えなかったし、俺達に危害を加えようなんて素振りには全然

なかった。高山さんがあやつり人形だと云うなら、目の前の貞子さんは一体何者なんだろうか。

清姫が困惑した表情で俺を見てくる。

どうやら清姫には貞子さんの声は聴こえていないようだ。俺だけに聞こえてるのは俺が貞子さんのマスターだから？

：いや、考えるのは後だ。

まずは貞子さんに付いて行き、彼女の話聴かなければ話は一向に進まないだろう。

「きよひー。もしも俺だけに貞子さんの声が聴こえたって言ったら信じろ？」

「勿論ですわ。他ならぬますたあのお言葉ですもの。それに、この状況でますたあが嘘を付くとは到底わたくしには思えません」

俺は貞子さんに付いて行く事に決めた。清姫も最初は困惑していたが、俺の真剣な表情を見て快く了承してくれた。

ーそれでもいい。さあ、こっちー  
果たして彼女は俺達を何処に連れて行くつもりなのだろうか？

森林の奥へとゆらゆら揺れながら歩みを進める貞子さん。俺達は彼女の後を必死に追い掛ける。

「貞子さんは本当に俺達を助けてくれるの？」

ー貴方って心配性なの？大丈夫、私は貴方の味方。いえ、ひよつとしたら：隙あらば貴方を呪い殺すかも知れないわね。……なんてねー

俺を見て楽しそうに両手で口元を抑える。冗談なのか本気なのか分からないが、彼女の言葉は何故か俺の胸に深く刻まれた。

でも、不思議と悪い気はしなかった。

ーねえ、何回も別の私に殺されそうになっているんでしょ？どうしてそれでも山村貞子を信じるの？ー

貞子さんは歩みを止めて、俺に振り返って問い掛けてきた。彼女が言う別の私というのは、恐らく何回も俺を呪い殺されそうとした貞子さんの事だろうか。

「どうしてって言われても、俺には貞子さんが悪者だとは思えないからかな？確かに貞子さんは怨霊で大勢の人を呪殺したんだとは思いますが、それにもきつと理由があるんじゃないかなって」

「ー理由？そんなのある訳ないじゃない。呪殺する理由なんて怨恨以外に何があるというの？ー」

貞子さんは心底不思議そうに俺に問い質してくる。確かに俺が口にした理由は、第三者が聞けば巫山戯てると一蹴されるような根拠のないものだ。でも、俺はそうは思わない。

「なら、今すぐ俺を呪い殺してくれ」

「ま、ますたあ！急に何を…!？」

俺の言葉に動揺する清姫。貞子さんも俺の言葉を聞いて驚いている様子だ。いきなりこんな突拍子もない事を言い出せばそれも当たり前な話だ。

俺は清姫を優しく抱き寄せた。安心させるように背中をポンポンと軽く叩く。すると、徐々にではあるが落ち着きを取り戻してくれたようだ。

「ー嫌よ。軽々しく私に命令しないで。貴方に死なれたら私が困るの。だから貴方を殺すことはできないわー」

「ははーん。さてはお主、ツンデレじゃない？」

そんな事を思っていると、貞子さんはぷいっと視線を逸らす。そんな彼女を見て俺の頬がつい自然と緩んでしまう。

俺が笑うと彼女は少し不機嫌そうに俺を睨んできたので慌てて真面目な顔に戻しておく。

「ー貴方…。私の事を馬鹿にしたでしょう？ー」

「そそ、そんな訳ないじゃないですか（棒読み）」

「ーふーん。まあ、別にいいけど。貴方が何を言おうとこの絶対領域からはそう簡単に逃げ出せない。此処は魔力を吸い取るだけじゃない。あらゆる宝具も加護も魔術も、この場所では全ては無意味になるー」

「宝具も加護、それに魔術ですら無意味…？」

「令呪も通用しないの?」

「ー当然よ。別の私は多分その事は知らないと思うけどね。例えば、かの有名な騎士王。アルトリア・ペンドラゴンの『約束された勝利の剣』、『全て遠き理想郷』がどれだけ強力であろうが、この領域の中では宝具は持ち腐れのガラクタダシ、加護も魔術も全く機能しない。ここはそういう世界ー」

「データラメな能力だけど、外部からの攻撃にはめっぼう脆いけどね」と付け加える。なるほど……。

つまり、この貞子さんが作った異空間の中でのみ絶対領域は真価を發揮する宝具という事か。

そして外部からの攻撃に対しての耐性がない宝具とはどういったものだろうか? 恐らく武器の類いだと思うが、魔術や加護を防ぐということとは武器そのものに宿っている力を抑え込む作用があると考えてよさそうだ。

だとすると対魔力系の防御系アイテム? それともー俺がブツブツと推測を小声で呟きながら考え込んでいると、「着いたわ」と云う貞子さんの声が聴こえてくる。

「ーこの井戸に飛び込めばカルデアとやらに戻れるわ。あいつらが来る前に早く行きなさいー」

「さつきから気になってたけど、あいつらって一体「ますたあ!」かなり強い魔力反応が周囲を取り囲むように至る所から感じますわ!こ、こんな数は幾らなんでも……何だつて!」

清姫の慌てた声に俺は思わず視線を向ける。彼女は険しい表情で周囲をキョロキョロと見回す。

「……………」

「な、何じゃこりゃあああああ!」

「……………」

右を見ても貞子さん。

左を見ても貞子さん。

後ろを見ても貞子さん。

前を見ても貞子さん。

100人はゆうに超えてる大勢の貞子さんがそこには立っていた。貞子さん達はまるで円を描くように列を組んでおり、俺達の動きを封じるように全方位を囲んでいた。

そして俺達を囲む貞子さんの中央に一人立ち尽くすのは……そう、召喚機から現れ俺が最初に出会ったあの貞子さんだ。

何でわかるのかって？うーん、漂う雰囲気があああの時の貞子さんとそっくりだから…？

「……………」

彼女がオリジナル、なのだろうか？

(う、嘘だろ。何だよ…この数…!?)

俺は愕然とした面持ちで彼女達を見渡す。この領域内だと貞子さんの数も増えるのか！垂れ下がった長い前髪で彼女達の両目は此処からじゃ確認できない。ただ、じつと猫背で全員立ち尽くしているのが気味悪く感じられた。

ー何をしているの？早く飛び込みなさい。死ぬわよー

俺のすぐ目の前で棒立ちしているツンデレの貞子さんが淡々と告げる。どうやら早くあの井戸に飛び込めと急かしたいらしい。

でもその前に…。

「あのだ、最後に一ついい？」

ー何？手短かにしてちょうだいー

「また君に会える？」

ー私みたいな化け物にまた会いたいなんて物好きね。怨霊に優しくしない方が身の為よ。ロクなことにならないものー

「ますたあ失礼しますわ！清姫行きまーす！」

此方を突き放すような刺々しい言葉。然し、何処か寂しそうな声色の彼女を見た俺は、堪らず彼女を抱き締めてしまいたくなるが、寸での所で清姫に首根っこ引つ掴まれてしまう。

結局言葉を交わす事は叶わないまま、俺達の姿は井戸の中へと吸い込まれるように消えていった。



## 幕間

カルデアの食堂はスタッフと召喚したサーヴァント達で賑わっている。カルデアに召喚された者は全員食事をする。食事をとる必要がないサーヴァント達ですら、この食堂を利用していた。そして食事は、ただ空腹を誤魔化すだけではなく魔力供給の役割も兼ねている。そのため、サーヴァントはマスターから供給される以外の食事を摂ることが推奨されているらしいのだが……。

「茨木！また厨房の冷蔵庫からプリンこっそり盗ったでしょ？前も言ったけどあれはメニューの献立のデザートとして提供するものだから勝手に食べちゃダメだからね」

「わ、我が盗み食いなどしている訳なからう？何を証拠にそのような事を申すのだ？」

「頬にプリンのカスが付いているよ茨木」

「何イ!?そんな莫迦な！今日はまだ1個しか食べておら……あつ」

「やっぱり食べてるじゃないか！もう茨木にはデザート禁止令を出さしかないかなあ……こりゃ」

「待て待て待て!?頼む！それだけは勘弁してくれ！私の楽しみなのだ！」

……このように。茨木童子は甘味に目がないらしく、よくタマモキャットやブーデイクに見つかって叱られている。茨木は最初こそプリン如きと言って1度しか食べていなかったのだが、最近では3度4度と食べている。茨木にとっては数多くある甘味の中でもプリンの甘味は格別の味のように、それを食べるためにわざわざ厨房に忍び込む程なのだ。

「やれやれ……。わざわざ盗みを働かんでも、一言声を掛けてくれれば喜んで作るのだがな……」

そんなやり取りを傍目に、エミヤはため息を吐いていた。厨房でのつまみ食いもプリンの盗み食いも、茨木が厨房に来る時は何かしら食べ物関係の出来事が起きている。エミヤは別に茨木が嫌いではない

が、ただ茨木のつまみ食いに困っているというのが本音であった。  
そんな時…。

——あの、此処って動画撮影はOKですか？マネージャーに連絡しても何故か繋がらなくて…——

「マネージャー？あ、ああ…。撮影は別に構わないが…」

自撮り棒にスマホをくっ付けた貞子さんがテレパシーでエミヤに話し掛けて来る。エミヤも少し驚きつつも、了承する。どうやら、動画撮影をしたかったようだ。

え？貞子さん…だよな？前会った時と明らかに雰囲気の違い過ぎるんだが…、とエミヤは心の中で思うも口には出さなかった。

——ありがとうございます。あの、重ね重ねすみませんが、顔出しは大丈夫ですか？料理の風景を撮影したいんですけど…——

「料理の風景を？私が料理を作ってる所を撮りたいのか？」

——はい。もし駄目でしたら料理の部分だけでも許可を貰えると助かります——

ペコペコと頭を深々と下げて頼み込んで来る貞子。エミヤは少しだけ迷ったが、まあそれくらいなら良いだろう、と撮影を許可する。

エミヤの了承に、貞子は飛び跳ねて喜びを表現した。

——ありがとうございます！では早速…。エミヤさん、撮影の邪魔にならないように隅っこの方に寄って貰っても良いですか？——

「私は此処に立てばいいのか？」

——はい！それじゃあ、動画モード開始つと——

この貞子さんは一体何者なのか？どうして動画撮影なんてしているのか？様々な疑問がエミヤの頭を過る。しかし、貞子さんから感じる魔力は紛れもなくサーヴァントの物であり、敵意も感じないので、エミヤはとりあえず様子見する事にした。

——皆さんこんにちは。貞子です。今日はカルデアキッチンで料理風景の撮影をしています！今回は頼れるおかんこと、エミヤさんにお願いで撮影させて貰ってます！よろしくお願ひしますね——

「誰がおかんだ！あ、いや…ゴホン…エミヤだ。今日は宜しくお願

いする」

自撮り棒にスマホを付けた状態で、器用にエミヤと会話しながら動画撮影を続ける貞子さん。

進行スムーズさから見ても、かなり手慣れているのがわかる。

——エミヤさんは普段どんな料理を作っているんですか？ やつぱり和食が多いですか？——

「そうだな。基本は和食が得意だ。日本出身だからな。然し、別に洋食が作れない訳でもない。貞さんが好きな食べ物は何かね？ 良ければ作るが……」

——ええ!?! 良いんですか! ではオムライスをお願いします!——

オムライス……。子供っぽいのが、どうやら貞さんはオムライスが好きらしい。エミヤは苦笑いしつつも、了解したと返事をする。

——やったー! ありがとうございます! では早速調理シーンを撮りますね——

そう言ってスマホを横にして撮影を始める貞子さん。動画には映っていないものの、どうやら自撮り棒でカメラも操作しているようで、器用にスマホを動かして調理風景を撮っていた。

——おお……流石エミヤさんは手際が良いですね。私も見習わなきゃいけないです——

「いや、私などまだまだ未熟だよ。それに、貞さんのように自分で動画を撮影している人の方が珍しいだろう」

——そうですか? 私みたいな動画投稿者は結構いると思いますけど……——

そういうものなのか、とエミヤは思う。カルデアには様々なサーヴァントが召喚されており、中には動画を投稿して小遣い稼ぎならぬ、OP稼ぎをしている者もいるとかいないとか。

——あ、ケチャップは多めをお願いします。トマトは体にいいですからね——

英雄王曰く、カルデアに召喚された貞子さんの正体は怨霊同士の集合体らしい。貞子さんの中には無数の貞子さんが存在しており、それぞれが個々に動いている。

人類を怨むが故に攻撃的な貞子さんもいれば、過去を忘れ、人生を  
楽しむ貞子さんも存在する。

ならば、自分の目の前でウキウキで料理の完成を撮影しながら待つ  
貞子さんは、どんな貞子さんなのだろうか？

そんな事を考えて、エミヤも少しだけ笑みが浮かぶ。すると、貞子  
さんはオムライスが完成しそうなのを悟るや、カメラから顔を上げて  
料理に目が釘付けになっていた。

「完成だ」

——ふわあああ……！凄く美味しそうです！早速食べなきや。そ  
れでは動画を止めて頂きますね。オムライスさん！いただきませす！

そう早口に言ったかと思えば、すぐさま撮影を止めてスプーンを握  
り締める。出来たてのオムライスにスプーンを入れ、一口掬いとる。

（これは……。貞子さんの素顔を拝めるチャンスか？）

エミヤはそう考え、貞子さんがオムライスを口に入れるまで待つ。  
口元までオムライスを運び、いざ食べようとした時……。

突然、スプーンで掬った一口のオムライスが一瞬で消えた。

（消えただとツッ!? 一体何処に……）

——うーん！美味しいですね！流石エミヤさんです——

消えたオムライスは、いつの間にか貞子さんの口の中に放り込まれ  
ていた。

（……何という早業。まるでマジックでも見せられてる気分だ）

エミヤは貞子さんの早業に驚きつつも、オムライスを美味しそうに  
食べる貞子さんを見て、少しだけ笑った。

——ふう……。ご馳走様でした！とっても美味しかったです！エ  
ミヤさん、ありがとうございます。また機会があればよろしくお願  
いしますね——

「ああ。何時でも食べに来るといい」

（……また機会があれば、か）

オムライスを食べ終えた貞子さんは、ぺこりとお辞儀をして食堂か  
ら去って行く。エミヤも軽く笑いながら、その後ろ姿を見送った。

貞子さんが食堂から去ると、空になった器をトレーいっぱいに乗せたタマモキヤットがエミヤの元までやって来る。

「オカンも遂に動画投稿者デビューか？何でも動画投稿者は最近のトレンドらしいからなあ。アタシも負けてられん！キヤットも動画を撮影して動画投稿者デビューするのだワン！」

どうやらタマモキヤットはエミヤがYouTuberデビューしたと勘違いしているらしく、勝手に対抗心を燃やしていた。

エミヤとしては、別に動画投稿者になりたい訳ではなく、ただオムライスを作る風景を撮影したいと言うから協力しただけに過ぎない。

「そういう訳ではないさ。ただ、オムライスを作る風景を撮影したいからと、貞子さんに頼まれただけだ。あと、オカン言うな！」

「何だ。つまらん。アタシはてつきり動画撮影に目覚めたのかと思っただろ。それにしても…遠目で見ていたが、貞子はオムライスが好きなのだ。怪しさ全開な見た目の割には随分と中身は子供っぽいのである」

タマモキヤットはオムライスを食べる貞子さんの姿を思い出し、少し意外そうな顔をする。確かに見た目と中身のギャップが凄い事は間違いないので、エミヤもその言葉に同意した。



廊下を歩いていた藤丸の耳に、聞き覚えのある声が聞こえて来る。

——うくん……。やつぱりここはこうして……。あ、いやでもこっちの方がいいかな？うーん……

——藤丸は声のする方へと歩いて行く。すると、そこには食堂の出入口で何やら悩みながらメモを取る貞子さんの姿が見えた。どうやら動画撮影のやり方を予習しているらしい。

（あれは…貞子さん？メモ帳なんて持って一体何をメモってるんだ？）

藤丸は気になったので、貞子さんに声を掛ける事にした。

「あの、貞子さん？何してるの？」

——だ、誰ですか!?

突然声を掛けられた事に驚いたのか、ビクツと体を震わせるもメモ帳を咄嗟に隠すように仕舞う。そして、何事もなかったかのようにゆっくりと振り返った。

——あ!なんだ!藤丸くんだったんですね。動画撮影の映える撮り方をメモってました——

が持てないのか、少し後ろ向きな事を言う。

然し、藤丸は「そんな事ない!」と力強く断言した。

——そ、そうですか?……では折角なのでお言葉に甘えて……—

貞子さんは少し恥ずかしそうにしながらも、藤丸の提案を受け入れた。食堂の休憩室に移動した二人は、備え付けられているソファーに並んで座る。

「さてと……何から話そうかな?」

——こういう時、私は何を話せばいいのか全然わからなくて……。本当にごめんなさい——

「謝らないでいいよ。俺が話したいだけだからさ」

——ありがとうございます。では、藤丸くんが私に聞きたい事って何ですか?——

貞子さんは申し訳なさそうな顔をしているが、それでも話そうとしてくれる姿勢に嬉しくなった藤丸は、早速質問を投げかける事にした。

「それじゃあ、さつき貞子さんが言っていた『サマラ』って人の事について聞きたいんだけど……」

——サマラちゃんについて、ですか?彼女は私の大事な友達です。私が困ってるといつも助けてくれるんですよ——

「友達……」

——はい。サマラちゃんは私の一番の友達です!——

貞子さんは嬉しそうに、そして誇らしげにそう答えた。貞子さんがここまで心を開く相手。一体どんな人物なんだと興味を惹かれる藤丸。

——私と同じ容姿をしているので、何れ何処かで会うかもしれないね——

果たして、そのサマラという人物と会える日が来るのだろうか？藤丸はそんな事を考えながらも、貞子さんの話を続けた。

「へ〜。貞子さんって戦闘は苦手なんだ」

——そうなんです。このカルデアに呼ばれている以上、戦いは避けられないのは解ってはいるんです。でも、私って呪いくらいしか取り柄がないので、ちゃんとお役に立てているのかなって——

貞子さんは不安そうな面持ちで、自分の戦闘での役割を話す。確かに、貞子さんの戦闘スタイルはかなり特殊で、敵味方問わずに混乱を招くような戦い方だ。

キヤスタークラスのような後衛の支援型……という訳ではなく、ひたすら呪いを積んでいくという、呪いのプロフェッショナル。

それも、敵側だけではなく味方にまで呪いを付与してしまうという、かなり厄介な戦い方だ。

確かに貞子さんの呪いは強力だが、それは味方にも被害が及ぶ恐れがある諸刃の剣でもあった。

——私の呪いは味方にまで被害が及ぶので、本当は戦闘には向いていないんです。だから、藤丸くんはあまり私を戦闘に参加させない方がいいですよ——

貞子さんの戦い方は確かに特殊ではあるものの、その性能の高さは折り紙付きだ。だが、その反面味方が戦闘不能になればなるほど強力な呪いとなってしまうので、使い所を間違えれば取り返しのつかない事態を招く事になりかねない。

「いや、俺は貞子さんの事を信頼してる。貞子さんさえ良ければ戦闘に参加して貰いたいんだ」

それは紛れもない事実だった。貞子は決して戦闘向きではないが、戦闘に参加させれば確実にその実力を遺憾無く発揮する事が出来る。

そんな藤丸の考えを聞いて、貞子さんは目に見えて驚いた。

——そう言ってもらえると……ちょっと嬉しいです。私なんかを必要としてくれているのは藤丸くんが初めてで……——

どうやら今まで彼女はあまり自分の力が必要にされた事がなかったらしい。

「俺だけじゃないさ。カルデアの皆も貞子さんを必要としているし、頼りにしてるんだよ」

——ありがとうございます。……そう言つて貰えると凄く、その…嬉しいです——

そう言つと、貞子さんは少し照れくさそうに俯いた。

（貞子さんつて本当に自己評価が低いよな。まあ、自分の力に自信がなくて不安になるのはわかるし、今まで色々あつたから仕方がないんだらうけどさ。でもやつぱりもつと自分自身を信じて欲しいな……）

藤丸も自分の力を過小評価して、よく自信を無くす。でも、そのお陰で自分が今までどうやって生きてきたのかを思い出し、前を向く事の大切さを学んだ。

貞子さんも自分の呪いが強力過ぎる事を気にしているようだけど、それは決して悪い事ではないのだと伝えたかった。

そして何よりも、藤丸としてはもつと自信を取り戻して欲しいし、その為には彼女自身が変わる必要がある。

（だから俺は……）

「困つた事があつたら何時でも相談してね。俺は貞子さんの味方だから」

貞子さんは首が取れそうな勢いで頷いた。

——はい。何かあつたら是非相談させて下さい。私は……一人じゃないのがこんなに嬉しかったなんて、初めて知りました——

貞子さんは嬉しそうに、そして少し照れたように笑つた。その笑顔はとても可愛らしくて……。

いや、待て。さ、貞子さんの素顔つてこんな感じなの!? ヤバい…可愛過ぎるんだが? これなら呪い殺されても男としては本望じゃないか?（絶賛混乱中）

——あれ? 藤丸くん、顔が赤いですよ? もしかして風邪ですか!? 大変! 私の呪いで治してあげないと——

そう言つて慌てる貞子さんを見て、今度は声を出して笑う藤丸だつ



た。

## 掲示板

【リングシリーズコラボ！ 山村貞子ピックアップ召喚】

1：名無しのマスター

なあ、みんな今回のPUどう思う？

2：名無しのマスター

>>>1

正直まだ様子見

3：名無しのマスター

>>>1

同じく

4：名無しのマスター

俺は引くぞ

！  
リングコラボである貞子さんがPUされるなんて予想外だからね

5：名無しのマスター

お前らは相変わらずだなwww

まあ、俺も絶対引いてやるがな

6：名無しのマスター

貞子さん全体的にステータス高くね？これ本場の聖杯戦争でもかなり上位な性能だろ

7：名無しのマスター

>>>6

確かに

8：名無しのマスター

でも、クラスはアヴェンジャーだろ？

理論上可能だとしてもアインツベルンみたいな反則技使わなきゃ普通は召喚なんざ無理だろ

9：名無しのマスター

あと、今回のガチャつてピックアップが別枠扱いだから星5の確率高いけどその分期待値も低いよな

10：名無しのマスター

確か、いつもより出現確率が3%上がってんだっけ？

11：名無しのマスター

一体どういうつもりだ運営（疑心暗鬼）

12：名無しのマスター

まさか貞子さんがサーヴァント化するとは・・・

嬉しいは嬉しいけど、そんな英霊になれるような逸話あるかねえ？

13：名無しのマスター

ワイ、映画のリングしか知らんのだが、他のシリーズってどうなん？

14：名無しのマスター

>>>13

観れば観るほど貞子さんに対する謎は深まるって感じ

正直、貞子さんみたいなのがサーヴァント化したらマスターも無事じゃすまないんじゃないか・・・

15：名無しのマスター

>>12

まあ貞子さん自体はただの怨霊だしな  
英霊になれるだけの伝説やら記録が有るとは思えないってのはワ  
イも思う

16：名無しのマスター

何で貞子さん『単独顕現』持ち何だろ？

17：名無しのマスター

そんな激ヤバなスキル持つてる理由なんて1つしかないじゃろ

18：名無しのマスター

さてはビースト適正あるなオメー

19：名無しのマスター

>>18

物騒過ぎイ！

20：名無しのマスター

貞子さんみたいな怨霊が単独顕現なんてスキル持つてたら人類滅  
亡なんて余裕だろ

21：名無しのマスター

いや、むしろなんでカルデアに召喚されてんのに人類に喧嘩売りに  
来てんだよ・・・(困惑)

22：名無しのマスター

貞子さんのお母さんがあんな目を背けたくなる死に方してるし、貞  
子さん自身も悲惨な最後だから貞子さんなら人類滅亡はやりかねな  
い気がしてきた

23：名無しのマスター

人類悪ならぬ古井戸の深淵からのファーストインパクトという訳か・・・

24：名無しのマスター

そんな最凶クラスの怨霊をカルデアに寄越すとか人理は絶対頭おかしいよ

25：名無しのマスター

>>>24

きつと魔神柱が人類史を滅ぼそうとする↓貞子さんが阻止する↓人理は守られる↓貞子さんは英雄として讃えられる。みたいな展開にしたいんじゃない？（鼻ホジ）

26：名無しのマスター

なお、英霊になつたとしてもそれを達成できる可能性は限りなく低い模様

27：名無しのマスター

むしろカルデアで召喚されてどれだけ戦力になっても、人類怨んでるんだからまず間違いなく敵に回るよね？ そんな爆弾を抱えるとか・・・カルデア絶対積みゲーやん！（絶望）

28：名無しのマスター

カルデア「我らの召喚機は人理修復に協力的な英霊以外は召喚されないように作られているから心配しないでいい」

29：名無しのマスター

>>>28

信用できる訳ねーだろ（憤怒）

30：名無しのマスター

いや、でも今回に限っては人理修復の為に協力してくれるんだろ？  
なら寧ろ有能じゃね？

31：名無しのマスター

そんな証拠が何処にある？ん？

32：名無しのマスター

>>>30

いや、貞子さんって人類史を憎んでるわけで・・・そんなやつが人類の味方をする訳ないんだよなあ・・・

33：名無しのマスター

ねえ・・・300連ガチャ回してるのに貞子さん来ないんだけど・・・

34：名無しのマスター

あれ？

俺いつ書き込んだっけ？（290連爆死）

35：名無しのマスター

>>>33

呪われてんじゃねーか？wwwwww（90連爆死）

36：名無しのマスター

（ワイはおっぱいタイツ師匠で廃課金したから今回10連だけや・・・  
30秒ってこんなに長いと思ったの初めてやで・・・）

37：名無しのマスター

いや、そもそも天井付けなきや持力で引くのは無理だろ！（30万使ったけど来てくれなかった男）

38：名無しのマスター

呼符10枚目で引いてしまつてすまない・・・

39：名無しのマスター

30連で引いたワイ、高みの見物

40：名無しのマスター

引いたニキに聞くけど、実際貞子さんって強いのか？

41：名無しのマスター

うーん・・・強いし、弱いとも言える、かな？

42：名無しのマスター

>>41

どうということ？

43：名無しのマスター

貞子さんって怨霊だから、まともな英霊みたいに真つ当な戦闘能力は持たないんだよ

でもその代わり呪いを積み積むほど貞子さんは強くなるし、どんな相手でも即死しかねないくらいの強力なスキルを沢山持つてるんだ（白目）

44：名無しのマスター

要するに弱体無効とか呪いを打ち消すものがないと勝てないってこと？

45：名無しのマスター

おまけに呪い放置していると敵も味方もバタバタ倒れていくから、いくら宝具が強いサーヴァントでもそれが原因で負けるなんてざらにあるぞ

46：名無しのマスター

>>43

いや、それは違う。怨霊とか関係ない。

ただ単に貞子さん自体がチート級に強い

47：名無しのマスター

呪いを積めば積むほど貞さんが強くなるとか何それ怖い

48：名無しのマスター

でも、これは朗報じゃね？

AC版にも貞子さんコラボ来るらしいし、これで呪いさえ何とかすれば良いんだから、対策とかも立てられるやろ

49：名無しのマスター

いや、でもそもそも話としてそんな強力な怨霊が召喚に応じた時点でカルデアの未来は・・・(察し)

50：名無しのマスター

(うーん。なんか地雷臭しかないんだよなあ・・・)

51：名無しのマスター

貞子さん全然絆ゲージ上がらなくて草

52：名無しのマスター

俺もさつきから絆上げの為に何回も周回してるけど全く2にならん

これバグってねーかあ？

53：名無しのマスター

運営が絆上げの難易度を高く設定してるんかね？



54：名無しのマスター

>>52

わかる

俺も全然絆上がらなくてバグを疑うレベル

エリちゃんはあんなにチョロいのに

55：名無しのマスター

まあまだ実装されて初日だし、そこらへんの検証ができないから  
しーない

というか、絆上げが辛いのは俺的には予想通りだから多分大丈夫っ  
しよ？（適当）

56：名無しのマスター

いや、どう考えたって問題だろ・・・貞子さんが絆上げの難易度高  
いなんて完全に人理終わる流れじゃん・・・

だってマスターすら信用してないって事だろ

57：名無しのマスター

よし！そんなに俺と絆上げたくねーってんなら徹底的に絆上げの  
旅に出てやんよ

貞子、覚悟しろよオラアン！（開き直り）

58：名無しのマスター

召喚早々、呪い殺されるとか普通にありそう・・・

あ、でも原作通りなら7日は大丈夫か

59：名無しのマスター

さつきマイルームでジャックちゃんを愛でてたら貞子さんに対し  
ての台詞あつたぞ

60：名無しのマスター

>>>59

マジかよ!?ちよつと見てくる！（大興奮）

61：名無しのマスター

>>>59

お巡りさんこいつです

62：名無しのマスター

>>>59

k w s k

63：名無しのマスター

『サダコいるんだ！あの人はわたしたちと同じ集合体のサーヴァントなんだよ！でも、わたしたちと違ってみんな仲が悪いみたい。なんでだろ？』

64：名無しのマスター

情報サンクス！

65：名無しのマスター

『わたしたちと同じ集合体』ってどういう意味だ？

66：名無しのマスター

まんま貞子さんが集合体、って意味だろう

67：名無しのマスター

…ほーん

完全に理解したわ

68：名無しのマスター

あーね

69：名無しのマスター

なるほど、つまり貞子さんは複数の怨霊の集合体って訳か

70：名無しのマスター

全員理解が追いついてなくて草

71：名無しのマスター

わざわざ集合体にする必要があるか？

貞子さん単体で良くない？

72：名無しのマスター

・・・というと？

73：名無しのマスター

いや、だつてさ。貞子さんって単体で強いんだろ？ ならわざわざ

そんな怨霊の集合体になる必要なんてなくない？

74：名無しのマスター

>>>73

確かに言われてみれば・・・じゃあ何でそんな事に？

75：名無しのマスター

チート過ぎるから弱体化してるか

もしくは、貞子さん単体じゃ霊基数値が足りなくて召喚できない…  
とかじゃないの

76：名無しのマスター

霊基数値が足りない・・・

つまり幻霊ってこと？

77：名無しのマスター

幻霊と英霊を融合させれば一つの霊基として確立するから召喚は事実上可能ではある

78：名無しのマスター

でも、それって言い換えれば幻霊と融合したから英霊としての格が落ちてるってことだよな？

79：名無しのマスター

いや、そもそもの話としてそんな物騒な怨霊をサーヴァントにするとか狂気の沙汰だろ（ドン引き）  
人類史を滅ぼす気か

80：名無しのマスター

ようやく貞子さんの絆が2になった・・・  
たかが1つ上げるのに9時間弱も掛かるとかこのゲームどうなってるの（困惑）

81：名無しのマスター

>>>80  
それがFGOクオリティだからしゃーない（白目）

82：名無しのマスター

みんなしてヤバイヤバイ言ってるけど、貞子さんってそんなやばい怨霊なの？ リングしか観てないからワケワカメなんだが

83：名無しのマスター

貞子さん自体が最強の霊能者だし  
らせんだと自分の遺伝子を念写コピーして復活とかして、更には他人を蘇らせたりとかしてた様な・・・

84：名無しのマスター

放置してると勝手に写輪眼の上位互換みたいな能力でどんどん増殖してくからなあ・・・

85：名無しのマスター

英霊としての強さとか関係なく危険度で言えばトップクラスだろ  
JK

86：名無しのマスター

人類史を滅ぼされたくなかったら死ぬ気で貞子さんの絆を上げる

87：名無しのマスター

>>>86

それで事態がどうにかなるんですかねえ

88：名無しのマスター

少なくとも貞子さんのヤバさは改めて認識できるからワンチャンあるんじゃない？知らんけど

89：名無しのマスター

あのさあ、貞子さんの性別のこれってなに？

90：名無しのマスター

アンドロギュヌス  
両性具有

ふたなりってことだ

91：名無しのマスター

？

ふたなりってなんだ？

92：名無しのマスター  
マジかお前・・・(困惑)

93：名無しのマスター  
>>>91

ふたなりってのは、その・・・あれだよ。つまりそういう事だ！(説明放棄)

94：名無しのマスター  
いや、わからねーよwww

95：名無しのマスター  
>>>91

ピュアニキに簡単に説明すると、  
要するにチンチンとマンマン、その二つが肉体に備わってるってことだよ

96：名無しのマスター  
貞子さんってかなり美人って話だから興奮しかしねえよオイ

97：名無しのマスター  
>>>95

マジかよすげー!!

98：名無しのマスター  
>>>96

変態だー!!

99：名無しのマスター

貞子さんの幸薄そうな見た目がまた抜ける  
その綺麗なおみ足で踏んでもらっていいですか？

100：名無しのマスター

というか、マンマンってwww

ふたなりとかよりよっぽど直球でヤバい単語で草生えるwww

101：名無しのマスター

草を生やしまくるな

そんな幼稚な反応ばっかするからお前らは童貞なんだよ

102：名無しのマスター

ど、どど、童貞ちやうわ！